

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第42号 2009年3月

発行人：八幡和三郎 編集長：服部 尚彦 事務局長：吉田 博行
事務局：〒153-0053 目黒区五本木2-47-5 Tel 03-3713-2096

『2009年新年会盛大に開催』

2009年1月17日、こまばエミナースにおいて76名が出席、目黒稲門会新年会が盛大に開催された。

石川智子幹事司会のもと、先ず八幡和三郎会長の新年の挨拶があった。八幡会長が昨年会長就任の後に母校の商議委員会で披露された母校が推進する「WASEDA NEXT 125」事業計画の概要を次の通り紹介された。

- (1) 海外からの留学生8千人の受け入れ
- (2) 留学生5千人を収容する寮の建設
- (3) 系列校の充実
- (4) 小、中、高、一貫教育の整備強化
- (5) 東京女子医科大と提携し、早稲田・理工学部の技術力を利用した医学分野の開発を推進する

我々の在学当時とは隔世の感があるが、これらを是非推進し、100年後、200年後には世界に存在感のある早稲田大学を実現して頂きたい。我々としてもその動向を見極めながらバック・アップして行きたい。



目黒稲門会には活発に活動する多くの部会があり、当会を支えるエンジン役を果たしており、各部会長の努力に感謝申し上げます。昨年は俳句の会が出来たが、更にこう言ったものを遣ってみたいと言う分野があれば企画して、部会を作って頂きたい。

若い人達を含めて是非部会に加わり、活躍されることを期待している。

次いで第一部の講演会に入り、司会より本日の講師・阿部喜久雄当会相談役の経歴が紹介された。

- 大正11年12月30日生まれ
- 岩手県旧制中学卒
- 昭和18年12月早稲田大学専門部在学中に学徒出陣
- 昭和19年9月軍隊在隊中に政令により専門部法律科卒業
- 復員後(株)歌舞伎座に事務職として勤務
- その後貿易商社に転じ現在に至る

阿部相談役は、本日の演題名を「吾、基より生還を期せず 学徒出陣」とインパクトの強いものにしたのは、当時の気持ちが全員100%死ぬだろうと思っていたことを表し、この演壇でその時代をご紹介したいと説明された。

(1) 早大入学前後 昭和6年満州事変が起こり、これが後の太平洋戦争へと繋がる所謂15年戦争の前触れとなった。満州では各地で勝ち戦が報道され、一部マスコミはこれに迎合して国民を戦争へと導く役割を果たした。憲兵が威張り出し、特別高等警察が出来て思想犯を取締まった。ほかに治安維持法、国家総動員法、軍機保護法、国防保安法が作られ国民を締め付けた。昭和14年になると物価統制令、映画法がつくられ、軍検閲の映画を見せられた。偶々親戚に早稲田の学生がいたので私も行くことにし、専門部法律科に入った。その少し前の昭和15年9月ドイツの機甲師団がポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発。内外共に緊張と不安が交錯し騒然とした世相となって行った。



(2) 学徒出陣 昭和16年12月8日、日本軍真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争は、緒戦の勝利に国民は酔いしれていたが、米軍の反攻で次第に不利になり、昭和18年9月文科系学生の徴兵猶予停止が発表され、愈々学徒出陣の時が来た。昭和18年10月神宮球場で数万人の見送りのもと、出陣学徒壮行会が行われた。最早生きて帰れぬと覚悟しつつも、皆忿懣やるかたない状態であった。陸軍は12月1日(海軍は12月10日)と入隊日が指定され、私は本籍地の関係で第八師団(司令部弘前)管区北部45部隊(盛岡)の戦車部

隊に入れられた。そこでの軍隊生活は苛烈を極めた。

(3) 甲種幹部候補生教育 兵隊としての基礎訓練が終わった頃の昭和19年2月中旬簡単な試験があり、3月1日付で幹部候補生、10日付で甲種幹部候補生に採用され、上等兵となって予備士官学校への入校準備に入ったが突然入校先を満州の奉天(現瀋陽)と聞かされてびっくりした。日本各地の同期生320名が集められ、昭和19年4月5日奉天陸軍予備士官学校四平分校に入校した。階級は4月1日付で伍長、6月1日付で軍曹へと進んだ。満州での教育は4ヶ月で切り上げられ、各地に配属されたが私は千島(ウルップ島)に流された。シャケやカニが捕れ、食料には不自由しなかった。その後、戦局が急迫する中で愈々本土決戦が叫ばれる様になり、米軍が上陸するとすれば鹿児島県志布志、関西方面、湘南海岸平塚付近、九十九里浜が予想された。幸運にも私は命ぜられて帯広に帰ったが、一緒にいた同期の人達は樺太やシベリヤに行き帰らぬ人となった。

それ故、我々は尊い命の代償として勝ち取られた平和の有難さを感じ、先達への尊敬と敬意の念を持って生きてゆかなければならないと思う。

次に懇親会に移り、始めに青木英二目黒区長から今年は丑年、一步一步しっかりと、住み良い街目黒を作って行きたいとの趣旨の挨拶を頂いた。

加藤前会長の発声による乾杯、次いで土川副幹事長より当新年会に初参加の12名の方々(本会報8ページ写真参照)の紹介があり、各氏より一言挨拶を頂いた。

談笑が盛り上がるうち中締め時間が迫り、土川副幹事長のリードで肩を組み、大きな輪になって「都の西北」を高唱。荒瀬相談役の挨拶をもって新年会の幕を閉じた。

(島田 記)

新年会出席者 (五十音順)

(来賓) 青木英二目黒区長

(出席者) 浅海敏之、阿部喜久雄、荒瀬修一郎、有山勇次郎、石川智子、石川純子、市瀬達夫、伊藤 悠、稲垣博信、井村正陽、岩佐幸子、岩佐好恭、岩崎春雄、岩崎正夫、岩瀬 暁、大久保建治、大杉邦雄、大竹一子、大野利幸、大山高明、小野 満夫妻、海沼美智子、笠谷興一朗、柏木 博、加藤栄護、川井信義、川崎真樹子、木村昭一、桑野祐光、小池早苗、郡山弘文、小杉 哲、後藤克彦、桜井輝隆、佐藤喜孝、島田久家、嶋田勝彦、庄野 耕、鈴木尚子、鈴木政雄、関 和平、外岡 明、田畑 繁、千野逸平、土川俊雄、手塚仁雄、中上美代子、永田耕治、服部尚彦、林田雅敏夫妻、樋口定廣、樋口俊彦、平田喜章、堀井良造、牧野武夫、松尾洋一、松田哲也、松戸 猛、水野弘文、村上 柁、村上 満、森家一三、保井 正、八幡和三郎夫妻、山本堅太郎、横山 大、吉田成孝、吉田博行、米田文彦、渡邊三郎、大橋ヒデ子(会員友人)

各部会からの案内・報告

囲碁部会

(1) オール早慶囲碁フェスタ2008

慶応義塾大学創立150年を記念して平成20年12月6日(土)日本棋院市ヶ谷本院の2階、3階を借り切って開催された。参加者は慶応OB155名、現役31名の186名、早稲田OB132名、現役19名の151名、計337名でした。第1回戦は早稲田66勝、慶応86勝、第2回戦は早稲田66勝、慶応88勝、計早稲田132勝、慶応174勝で慶応に軍配が挙った。目黒からは八幡和三郎氏(S33年 商)、桑野祐光氏(S33 商研)、郡山弘文氏(S27年 商)、保井 正(S34 政経)が参加した。

(2) 忘年囲碁大会

12月17日(水)恒例の会が下目黒住区センターで開催された。4クラス、ハンディ戦の熱戦の結果は以下の通り。各クラスの優勝者は

A 荒瀬修一郎氏 (S28 法)

B 杉山泰大氏 (S28 商)

C 永田耕治氏 (S36 商)

D 樋口定廣氏 (S17 専法)

年間最多試合 郡山弘文氏(S27 商)

年間最多勝率 杉山泰大氏(S28 商)

が選ばれた。

忘年会は「日本料理 松喜」で有山勇次郎氏(S26理工)、高橋栄一氏(S54 理工)も加わり、09年はオール早稲田囲碁祭に優勝して神楽坂で祝杯をと意気盛んな一日でした。

囲碁部会長 保井 正

カラオケ部会

昔懐かしい歌から最新の歌まで、世代を越えて幅広く、童謡・歌謡演歌・軍国歌謡曲・クラシック等々、お酒を酌み交わしながら、持ち歌を、各自特徴のある節回しで歌い、カラオケを満喫して賑わいを見せております。

先輩・後輩の別なく、時間の合間をみて、楽しみましょう。声を出して歌えることは健康のバロメーターです。

カラオケ部会長 海口昭治

旅行部会

旅行部会は5月頃と11月頃の年2回の旅行を毎年実施しております。基本は専用バスでの一泊二日4食飲み物付きで、おもしろ可笑しくたまには勉強にもなる旅を心がけております。前回は昨年11月に「飛騨高山」と「世界遺産・白川郷」の旅を28名参加で楽しみました。詳細については、本会報の中島侑三先輩の初参加感想記をご覧ください。

今年も5月中旬と11月の2回を予定したいと思いますが、ご希望があれば是非お聞かせ下さい。過去5年

推薦のことば

会員阿部喜久雄氏に対してエクスプレス（含む会報）に掲載するエッセイの投稿を要請しておりましたが、〔太平洋戦争そして学徒出陣……戦中派思い出の記〕の寄稿があつたので、今回これを折り込むことにいたしました。先の大戦において戦況は苛烈を窮め戦局多難の時、数多くの学徒が初級指揮官として硝煙弾雨の中に挺身しました、嘗て甲種幹部候補生の教育訓練を受け指揮官として軍籍に身を委ねた小生も阿部氏の一字一句に共感を覚える者の一人です。六法全書を銃と剣に替えざるをえなかつた同氏の当時の様子が如実に描かれております、因に、日・中戦争、ノモンハン事変、太平洋戦争において、早大卒業後或いは在学中に陸・海軍に動員されて戦場に駆り出され戦死した者と戦傷病死した者を含めると実に5000名（正確には4881名）……早稲田大学資料センターの調査による……近くの^{たひ}可憐な命が散っております、その慰霊と平和を願うための立派な“平和祈念碑”が平成2年10月に大隈庭園に建立されています。

ふと、浮かんだ私の拙い一句を添え、学友の歴史の一頁としてお読み願えれば幸いです。

“今は亡き^と学友の思いを偲びつつ

語りしことを今ここに見る“

目黒稲門会

事務局長

樋口定広

太平洋戦争そして学徒出陣・・・戦中派思い出の記

目黒稲門会 阿部喜久雄（昭和19年専法卒）

まえがき

この小文は曾て私が勤務した会社のOB会が発行している小冊子に寄稿したものです、基より文才などあろう筈もない私が恥の上塗りになっては、と思ひ前記OB会に対して再三固辞しましたが、投稿を強く慫慂されたため心ならずも出稿した次第です。私自身が戦場に身をおいた体験などを踏まえ、事実に基づき記述したのでフィクションや誇張は全くありません、併し乍ら、何分にも半世紀も前のこと、すべてが遥か遠い忘却の彼方に過ぎ去った事柄が多く少々頼りない部分や字句に誤りがなかったかな！と思いつつペンを運びました、またいまごろになって何故太平洋戦争なのだ、と怪訝に思われはしないか、など多少のためらいもありましたが意を決して書いたのがこの駄文です。エクスプレスには今回含めて数回に亘り掲載させていただきます、何卒ご判読下さい、文中に思い違い、記憶違い等あるかも知れませんがご容赦のほどお願いいたします。

I. 旧制中学～学徒出陣

古い話です。時は半世紀以上も遡ります。

昭和の初期、陸軍の野望によって日本の軍隊が満州に侵出、排日的な中国の北伐の頭目であった張作霖元帥を芟除すべく、時の関東軍高級参謀河本大作大佐が部下に命じ満鉄の線路上において列車を爆破して、旅行中の彼を爆殺したのがはじまりで、その後ますます日本排斥の声が高まってゆきました、そして遂に昭和6年、満州事変が起こりました。このとき小学生であった私達の担任の先生が召集されて戦場へ向かわれ、纏て胸に功何級かの金勲章を下げて帰って来たのを記憶しております。この時代は金鵄勲章をもらおうと生涯にわたって結構な恩給がもらえたので、ちょっと評判になりました。何しろお巡りさんの初任給が月額32円ぐらいのとき、その先生は年額ではあるけれど百数十円何がしがもらえるとのことで（等級によって金額に差があり、功1級から功7級までであった）、とても良いお小遣いになるなど、口さがないうるさい連中からうらやましがられたものです。この金勲章の恩給も数がふえた為か、太平洋戦争になってから一時金の給付に変わってしまいました。

この満州事変は後の太平洋戦争に繋ってゆき、所謂15年戦争の前触れとも言われる重大な意味を持った事変だったのです。当時既にアメリカは日本陸軍の目に余る暴走に、神経を尖らせはじめておりました。一方国内では国粹主義・超国家主義が声高に叫ばれるようになり、陸軍の後押しを受けた極右が擡頭、それに迎合した一部マスコミの煽動に乗った国民は熱に浮かされたように何か目に見えない暗みに引きずり込まれつつありました。

もうその頃には一攫千金を夢見る欲張り共や、自称大陸浪人、

将又最近何かと取り沙汰の多い慰安婦を引き連れ大陸を目指した曖昧屋が蠢き始めたのもこの頃からです。

満州事変を契機として、翌昭和7年3月には関東軍の後押しで満州国が建国し、5月には犬養首相が海軍のエリート士官らに問答無用とピストルで射殺されるテロがありました。このような殺し方はヤクザと同じで、これが兵学校出のエリート士官の仕業なのかと驚いたものです。

これは「5・15事件」と呼称されました。

こうして日本をめぐる内外の情勢は、一般国民大衆が気づかない間に急速に険悪化し、切迫しつつありました。

しかし当時の都会の世相はそれに反し自由享樂的で、軍部の勝手さに「またか・・・」といった無関心なところもあり、赤い灯や青い灯の下で美酒に酔いしれ賑やかに「東京行進曲」や「東京音頭」「酒は涙か溜息か」など非軍国調の流行歌が大流行をしていました。大あらしのせまり来る前の息苦しい世の中を庶民は酒や歌でごまかしていたのでしょうか。私も二村定一と言う歌手が歌った「君恋し」（戦後フランク永井がリバイバル）を小学校の廊下で歌いながら歩いているところを校長さんに聞き咎められて大目玉をいただいたことがあります。

昭和11年、「2・26事件」が起り、翌12年7月北支那蘆溝橋で日・中両軍が衝突、全面的な戦争に突入してゆきました。この日支事変が始まって間もなく動員されて大陸に送られた兵士が、纏て遺骨となって白木の箱に収まり帰ってくるようになりました。一年志願（後の甲種幹部候補生）の少尉で出征した私の親戚の叔父さんも戦死して功五級の金鵄勲章と勲五等の勲章と共に遺影の大尉になって帰って来ました。

当時私は旧制中学三年に在学していましたが、日毎に軍靴の足音が高くなってゆき軍人さんが威張り出し、憲兵が耳を敬て、特別高等警察が目を光らせ、何やらとても「キナ臭い」世相になりつつありました。

国家総動員法・治安維持法・軍機保護法・国防保安法という軍部の都合による法律で国民は雁字搦めにされ息詰る日が続くようになりました。この年、海軍の反対を押し切って陸軍主導の日・独・伊三国からなる防共協定が結ばれました。このころ日本軍は中国の首都南京を占領したと言うのでお祝いの提灯行列が行われ、それに駆りだされました。行かない者は非国民呼ばわりをされてとても不愉快な思いをしたものです。

陸軍さんの鼻息は大したもので、当時既にアメリカやイギリス、フランス等の悪口を言いながらヒットラーが率いるナチスを盛んに礼賛しておりました。そんなこともあってヒットラーの書いた《Mein Kampf》の日本語訳《我が闘争》など競い合って読まれその当時のベストセラーと騒がれました。私が学んでいた中学に

も大変な右寄りの先生がいてその本を読むように奨められ、読んだ者はその先生の科目の試験に何点か上乘せしてもらえると、いうことで厭々読んだ覚えがあります。

昭和14年には文化の統制が始まり、戦意を高揚し、国策に沿うような映画を作って国民に見せる目的で映画法が公布されました。テレビのない時代なので情報を操作しながら、世論を一つの方向に向けるのには、ラジオ、新聞、映画が効果的だったのでしょう。学生の長髪や、女性のパーマ禁止がさげばれ、個人の気持とか人権などは全く顧みることなく無視をしてどこからともなく世論を一つの方向に誘導、たった一片の紙切れにすぎない令状と称する厄介な代物を突き付けて否応なしに引っ張って行き軍需工場で只奉公させる為の国民徴用令が公布されたのもこのころでした。

豆タン（豆は少年・・・15、16才。タンはタンクの略）即ち少年戦車兵の募集が始まり、この少年達は後に私達が予備士官学校へ入校したころには戦車学校を卒業して、見るからに逞しい立派な下士官即ち伍長・軍曹となり我々の教育期間中教員（助教）として戦車の操縦や砲の打ち方などを教えてくれました。（陸海軍共少尉以上が教官として訓育に当り、下士官は教員または助教と呼称していた）。因に海軍ではそれより大分早く小学校高等科卒業生79名を少年飛行兵として採用したのが昭和5年で、後に乙種飛行予科練習生の制度に変わり、終戦時には特務少尉・中尉・大尉に昇進した者もいました。

昭和15年9月にはドイツの機甲師団が電撃的にポーランドに侵攻、第二次世界大戦の幕が切って落とされました。内外共に、緊張と不安とが入り交じり騒然とした世相になって行くのですが、私達も来春の卒業を控え、最終的に進路を決めなければならない時期が迫っておりました。勉強は勿論のこと軍事教練にも重きがおかれ、首から勲三等旭日章を下げ、聯隊長を歴任した予備役の陸軍大佐が配属将校として来ていて（その下に3、4名の将校がいた）散々に扱かれ厳しい訓練が続きました。しかし教練の検定に合格していないと軍隊に入ってから幹部候補生の受験資格がないので皆いっしょうけんめいに頑張ったものです。この頃は物資も不足がちでした。すべての面が大分窮屈になり、日支事変の戦費や軍備に金がかかったのでしょう。外貨節約の為か輸入品であるコーヒー豆も不足がちになり、喫茶店に入っても顔馴染でないと大好きなコーヒーも飲めなくなりました。それでもまだ街には大正ロマンの古き良き時代の名残が微かではあるけれど残っていて、数年後の大変な時代に比べればまだまだましだったと思います。読みたい本があっても紙が払底したため出版物も統制され、世はまさに統制経済の真只中にあり不自由を強いられるありさまでした。そんな中であって、どこから手に入れたのかマルクスのDas Capital<資本論>、レーニンの<マルクス=エンゲルス=マルクス主義>、カールマルクスの<賃労働と資本・賃金・価格および利潤>などの本を持っている友人がいて密かに隠れて

回し読みをしましたが、少々難解で読みこなすには至りませんでした。このような本は当時赤本とよばれ持っているだけで若し憲兵や特高警察に見つかり、即豚箱行きとなったので、隠れて読むことにスリルを感じたものです。当時共産主義は非合法でした。

出版物も思うように手に入らないような時世ではあったけれど映画も音楽も（勿論軍部から検閲を受けて製作されたものではあるが）自由に選ぶことが可能でした。今のようにテレビがなかったし、レジャーの施設もなかった時代なので、本を読むか、映画を観るか、音楽を聴くか、その程度の娯楽しかなかったが、私の場合は専ら音楽に明け暮れていました。音楽といっても難しいクラシックではなく、ぐっと砕けたポピュラーなシャンソンやジャズ、特にタンゴが大好きで、ニキビ面の旧制中学三年生頃からレコードを買い始め、欲しいレコードがでると参考書を買うからと言ってはおふくろに小遣いをせびり、内緒でレコードを買って、それが何枚か重なれば目立ちます。あるとき親父がレコードのかたまりを指差して「お前このごろ参考書が大分増えたな！」と痛いところを突かれうしろを向いてペロリと舌を出しバレタか！！の状態。今とは違い親父が怖い時代でした。当時のレコードは片面1曲だったので結構嵩張ったのです。

タンゴは上品なクラシックと違い、格が少し下がり日本的に響えれば古典の長唄に対する民謡といったところか、少々泥臭く洗練はされていないけれど、どこか魅力に満ちた音楽です。垢抜けないのも道理、それは19世紀後半に南の国アルゼンチンの港街、ブエノスアイレスのカミニートに住む下層の民の間で起った民族音楽なので無理からぬことなのです。

1910年代にバンドネオンを中心とした演奏様式が定着して発展した都市音楽がアルゼンチンタンゴで、母体は habanera, milonga, candombe などの舞曲で、人生の悲哀や憧れをドラマチックに表現しながら、どの曲も歯切れがよく、加えて哀愁に富んだ旋律に私は虜になり、どっぷりとタンゴ漬けになってしまいました。ブエノスアイレスで生まれたタンゴはその後大西洋を渡り対岸イベリア半島の港街リスボンに上陸して、またたく間に全ヨーロッパに広まってゆきました。ヨーロッパでもタンゴの作曲家がたくさん出て有名な曲が数多く作られました。例えば、スペインではイサーク・アルベニスの「アルベニスのタンゴ」、フランスではエドアル・ヴァン・マルデルランの「夢のタンゴ」、ポーランドではイエルシ・ペテルブルスキーの「オオ・ドンナクララ」・・・この曲はジプシーの哀しげな旋律を取り入れた聞く者をしてえも知れぬ気持ちにさせてくれる美しい曲です。また、イタリアではレオネロ・カズッチの「私のジゴロ」、オランダのアリー・マースランドの「オレ・ガッパ」そして名作中の名作と言われる「碧空」はドイツのヨゼフ・リスクナーの作曲です。戦前のドイツ映画「夜のタンゴ」の主題歌として作られたハンス・フリッツ・ベックマンの曲も日本人にはとても好まれました。その他「真珠採り」「黒い瞳」、「ハーバーライト」などコンチネンタル

タンゴには不朽の名曲と言える傑作が多くあります。

アルゼンチンタンゴとコンチネンタルタンゴの違いですが、アルゼンチンタンゴはリズムが激しいのに対し、コンチネンタルタンゴはメロディアスで、前者はバンドネオン、ヴァイオリン、ピアノ、ベースといった編成ですが、後者はもっと自由な編成で、普通バンドネオンの代わりにアコーディオンを使っています。

コンチネンタルタンゴは華麗で洗練された感じですが、私はアルゼンチンタンゴに代表される「ラ・クンパルシータ」(ウルグアイ人のヘラルド・エルナン・ロドリゲス作曲)「さらば草原よ」「タンゴハバナ」などの曲も大好きでした。

こんなことで、あんまり勉強に勤しんでいなかった私は卒業を目前にして進路を決めかねておりました。クラスメートはそれぞれ志望の学校を目指し、学力と体力に自信のある者は陸海軍の諸学校、即ち、陸士、海兵、海軍機関学校、陸海軍の経理学校へ。学力体力共に自信はあるけれど職業軍人は、いやよ!!と言う者ナンバースクールへ。変わったところでは満州の建国大学や上海の同文書院など。また、日支事変のため多くの医者が軍医として召集された後の医師不足の補充と軍医官養成を目的として急速各帝国大学医学部や私大医学部に併設された臨時医学専門部(中卒後四年間の履修をもって医師国家試験を受け医師になることができた臨時措置法による)など視野に入れて皆頑張っていました。

母校盛岡中学は、日本で最も古い中学校の一つです、東京府立一中(現日比谷高校)の創立から遅れること2年、明治13年に開校しており今年、即ち平成12年に創立120年を迎えますが戦前には、名だたる陸海軍の軍人さんを輩出しておりました、陸軍では南部藩出身の東條英教中将(東條英機大将の厳父)をはじめ陸軍大臣を歴任した板垣征四郎大将、他数人、海軍には特に多く藤実大将、山家他人大将、柄内大将、米内光政大将、及川吉志郎大将、原敬二郎大将、八角三郎中将などに加えて、パイス・アドミラル、リア・アドミラルまでいれると太平洋戦争が始まる前の昭和14年頃で20数人近くに達しており、草深い山奥の中学からこれだけの将星が出たというので、当時のマスコミの注目の的でした。

そのためでもないでしょうが、学校でも陸海軍の諸学校に進むことを奨励、その合格率は全国で一位との評判でした。また、文人では石川啄木や宮沢賢二、金田一京助、野村胡堂なども出ております。

話は違いますが、この学校の校歌のメロディーは皆さんご存じ、以前パチンコ屋などで威勢よく鳴らしたり、右翼の街宣車がボリューム一杯騒音を撒き散らす例のあの曲、即ち海軍、軍楽少佐瀬戸口藤吉氏作曲によるところの「軍艦行進曲」なのです。日本中に学校多しと雖もこの曲を校歌に使っているのは盛岡中学だけではないだろうか。戦後学制が新制度に変わり現在は県立盛岡一校となっているが校歌はそのまま踏襲しているそうです。女子生

徒からは恥ずかしいとの声も聞かれるとか。

話は大分本筋から逸れましたが、クラスメートはそれぞれ上級校を志望して頑張り、努力しているとき、生来怠け者で、学力、知力共に凡ての面で能力が劣り、あまつさえタンゴなどに現を抜かしていた落ちこぼれの私など、到底一流校などへ入れる訳がなく、焦燥感に囚われ悩んでいましたが、親戚に早稲田大学在学中の者がいたので、彼の奨めにより何となく早稲田大学へ願書を出すことにしました。現今では新幹線の停る都市か、強いて言えば在来線でも特急の停まるところには大抵大学と称するものがありますが、当時は上野から札幌までの間に大学は、仙台の東北帝国大学と札幌の北海道帝国大学の二つしかありませんでした。



早大入学のとき

早大(専門部法律科)に入ることは入ったけれどまた漫ろ怠け癖が出て、大学の近くの喫茶店でタンゴを聞いたり、新宿武蔵野館の隣りにあった「ムーラン・ルージュ」などに入り浸り、左ト全や明日待子などが演じる軽妙な演劇に笑い興じたりしていました。兵隊さんが大陸で命を投げ出して戦っているとき、のんびんだらりとこのような生活をしていてもよいのだろうか、ふと心をよぎることがあった。これが良心の呵責と言うのでしょうか。ダンスホールのフロリダにも閉鎖命令が出て行くところが狭まり結局講義を聞きに教室に行かざるを得なくなりました。コーヒー豆の輸入も跡絶えてコーヒーも飲めなくなり、世は正に挙げて厳しい戦時の態勢に入ってゆきました。当時のマスコミはこぞって軍部のお先棒をかつぎ、ちかごろの朝日新聞社などは少々偏向ぎみであるような風評ですが、当時は軍の御用新聞みたいのところもあって、軍国主義を盛んに鼓舞していました。多分昭和十三・四年ごろだったと思いますが、朝日新聞社が皇軍感謝の歌を全国から懸賞募集をして当選したのが例の歌「父よあなたは強かった」という歌です。大陸で勇戦している将兵を称える歌です。～泥水すすり 草をかみ 荒れた山河を幾千里～と続くのですが、これが当時の戦場のありさまの比喩であったとしても、今の若い人達に聞かせたら大笑いするでしょう。泥水なんかすすった

らすぐお腹を壊しちゃうじゃない、牛や馬や兎ではあるまいし人間が何で草を噛んだのよ、第一美味しくもないし栄養もとれないでしょ、そんなことで、よくも幾千里も行けたわねと。

朝日新聞がこんな有様だから、他の新聞や、雑誌は勿論のこと映画も、そして一番影響力を發揮したのは某国営放送局ではなかったかと思えます。国粹主義、超国家主義、非常時、皇国の危機、一億一心火の玉になれ、土曜・日曜がなくて月月火水木金と、何とも息苦しい日を送らなければなりません。やがて太平洋戦争が始まり、国民はなべて誠私奉公を強いられ、自由を剥奪されてしまいました。

ある日、憂鬱な気持で学内を歩いていたら掲示板の前に学生が^{たむろ}屯しているので何気なく覗いたところ『海軍予備学生（兵科・飛行科）募集の件』という告知が出ていました。希望者は試験のうえ、少尉候補生に準ずる身分で採用し一年間の教育を実施の後、海軍予備少尉に任官せしむる予定伝々、とありました。カラス（水兵）から一階級ずつ進級して準士官になるには特に成績の良い者でも十数年かかると聞いていたので、たった1年で準士官の上位になれるのなら、一兵卒として馬糞臭い陸軍へ行かなくても済むし、大好きな飛行機にも乗れるしと早速何人が応募して大学を去って行きました。戦後この学友達の大部分と再び相まみえることはありませんでした。そのとき私は国を護るという大義名分はわかるけれど、軍人を志願して、何でそんなに死に急ぐのだろうと思ったものです。当時国民の義務の一つでもあった兵役も在学中は延期できる制度になっていたのをそれを利用し、合法的な徴兵忌避をしていた私などは志願のうえ身を投げ出し大学を去って行った学友から見れば愛国心に欠けた意気地なしに見えたかもしれせん。

緒戦の勝ち戦もだんだん旗色が悪くなり、戦況は日を追って苛烈窮まり負け戦の情報もロコミで伝わるようになったので私の心底には、そのうち戦争も終わるだろうと厳しさの足りない甘い、そして少々卑怯な思いがあったのは事実です。

昭和18年9月某日、私は例によって映画館におりました。突如映画が中止されて臨時ニュースが伝えられました。それは文科系学生の徴兵猶予停止を告げる東條首相の声明でした。いよいよ来るべきものが来た。私は緊張を全身に感じ、愕然としてしまいました。10月になり後に残る理科系の学生や高等女学校以上の学生・生徒数万人の見送りのもと、出陣学徒の壮行会が明治神宮外苑で盛大に催されました。10月とはいえそぼ降る小雨の中全身びしょ濡れになって寒さを堪えながら各校、校旗を先頭に分列行進をしました。そのとき、段上に並居る陸・海軍の将軍達は面前を校旗がとおる度に各校の校旗に対して敬意を表し挙手の敬礼を行ったのは驚きでした。それは青天の霹靂と言っても過言ではなく思いがけぬ出来事でした。彼等は天皇旗、国旗、軍旗、軍艦旗以外の旗は敬意を払うべき旗としての認識がなく、従来は一顧も与えないことがあたりまえとして受けとめられていました、従

って、校旗に敬礼をするなど見たことも聞いたことも、なかったからです。観閲官に対する、頭右の号令に対し一際高い段上から答礼を行ったのが時の首相東條英機大将でした。そのとき彼は彼独特のスタイルである勲一等旭日章一つだけを左胸に下げ挙手をして学徒を見送ったのです。挙手をしたときの真白い手袋がとても印象的で、今でもそのときの白さがはっきりと思い出されます。得意絶頂の彼がそれから僅か数年後には、デス・バイ・ハンギングになるとは、我々は勿論ですが本人も予想だにしないのではないのでしょうか。首相の声明と勅令によって2ヶ月後には入隊をせざるを得なくなった私達は、貴重な日々をいとおしむよう送りました。



早大入学時の友人と

そのころは联合国側の作曲家の手による音楽、クラシックもシャンソンもジャズも凡て禁止になり辛うじてタンゴだけはおおっぴらに聞くことが許されていました。タンゴは戦争には関与しない中立国アルゼンチンの音楽であり、コンチネンタルタンゴのうち同盟国ドイツ産のものだけはよいという制限つきでした。た、短波のラジオなどは持っているだけで敵国の放送を傍受できるという理由により厳しい取り調べを受け、直ちに没収されるありさまでした、このように考えられない情報の遮断と人の心の中に土足で踏み込むような思想の締付まで行われました。学徒出陣式を終えて2ヵ月の間に半ば諦めに似た境地と覚悟はしたつもりではあったが、陸軍は12月1日、海軍は12月10日と期日が指定され、当日は母親が苦勞してどこからともなく都合して作ってくれたお祝いの膳に向かい俎の鯉の如くおとなしくどうにでもしてくれと言うような、不安と腹立たしさの入り交じった複雑な気持で未知の軍隊の営門へ向かいました。

つづく

II、甲種幹部候補生採用

～奉天（瀋陽）陸軍予備士官学校での教育

昭和18年10月東條首相外、綺羅星のごとく並んだ陸海軍の将軍、アドミラルと、数万におよぶ旧制中等学校以上の学生、生徒の声援のもと神宮球場で壮行会が行われたが、そのときの、東條大将の訓示および後に残る学生の送別の辞の要旨を書いた当時の日記が郷里盛岡の生家で十年ぐらい前に見つかったので、思い出を手繰り寄せてみたいと思います。

まず東條さんは「本日多数の学徒諸君の壮途に当り、些か所見を述べて送別の言葉としたい」とのはじまりで、「諸君は大東亜共栄圏新秩序確立のため、いまや蹶然として象牙の塔より出で立ち、ペンを剣に代え、聖戦完遂のために勇躍征途につかんとしております。本職は、優秀なる諸子の今後に絶大なる信頼と期待を寄せるものであります。諸子におかれては帝国百年の大計のため進んで身を挺し、もって大御心を安んじ奉らんことを願うものであります」ざっとこのようなことが記してあります。要約すれば、天皇陛下のため、国のため一身を捧げる覚悟で出征して欲しい、と聞こえたのは、あながち私一人だけの僻みではなかったようであり、忿懣やるかたない状態でした。

一方、後に残る理科系学生代表の送別のことばはさすがでした。「本日兄等の壮途を見送ることになりましたが近い将来我々もまたペンを捨てて戦場に馳せ参じる決心です。諸兄におかれては我等が後に続くを信じ、安んじて征途につかれることを願うものであります。諸兄の武運が長久であることを心から祈ると共に、飛捷の暁には剣をペンに持ち直し、再び学び舎で相まみえる日の早からんことをこいねがうものであります。」なんと語るも涙？聞くも涙？。出陣する我々は、後に残る諸君の言わんとするところ、よーくわかったよ。君達送る側は、おおっぴらにはいえないけれど、先輩たちよ、死んではいけないよ。戦争が終わったら今度は剣を捨てて、お互いまた教室で逢いましょう、とにもかくにも武運の長からんことを祈ります、と聞えたよ。

このようなことがあってから、入隊の指定日には本籍地の関係で、第八師団（師団司令部弘前）管区の北部45部隊（盛岡）という戦車部隊に放り込まれました。部隊長は後に奇遇として記述する三田村中佐でした。入隊前には、あまりにも気促に、不規則な生活をしてたのがあたり、お池にはまったどんぐりころころみたいに、さあ大変、それこそなす術もなく、茫然とする始末、それでも唯棒くいみたいにつっ立ってばかりもいられないから、鞭で打たれるおとなしい羊のごとく何とか早く軍隊に馴染むようと

少しは努力したつもりでした。身分は、大日本帝国陸軍最下級の兵隊さん、即ち階級章は星一つの陸軍二等兵、兵役、懲役一字違いとはよく言ったもので、懲役のほうは知る由もないけれど、まったくそのような状態なのです。例えば、オシッコをしたくなっても自由に、勝手に便所に行ってもはいけません。阿部二等兵廁（オトイレのこと、軍隊ではそう言っていた）に行ってもいりません、と部屋の奥に鎮座まします上等兵殿や、軍隊に入って二年以上にもなるのに未だ上等兵になれず万年一等兵殿に聞えるような大きな声で断らなければいけないのです。声が小さいと何回も何十回でもやり直させ面白がっていました、今で言う苛めの一種でしょう。彼等は現役兵だから徴兵延期をしていた私たちより年下で入隊前はお百姓さんや左官屋の小僧さん、そば屋の出前持ち、ヤッチャバのあんちゃん荷車引きや自動車修理工場の追いまわしなど種々雑多な連中なので、“この野郎共”という気はあったが、そこは軍隊、星一つの新兵ではどうすることもできなかったのです。小用を足すだけでもこの有様、右を向いても左を向いても上官だらけ、不注意で若し欠礼でもしようものなら直ぐ大目玉頂戴ということになるので気を抜くことができませんでした。彼等の心底には短期間で将校になることができる私たちに対する妬みがありその裏返しの苛めと受けとれました。



在京各大学在学中に出陣する旧中学の同級生 右3筆者

十二月になると、東北でも北寄りの盛岡は雪が積もりはじめ薄暗いうちに起床ラッパの音と共にたたき起こされて、そのしごかれようは大変なものでした。文科系のあまり頼りにならない学徒兵から一日も早く、短期間で娑婆気を取り除き、代りに軍人精神を叩き込むという激しい訓練は将来の初級指揮官養成を目的とした所為もあってか僕もまた厳格を極めました。そのありさまは今

この紙面でどのように表現してもご理解いただけないでしょう、だから細かいことは割愛します。

陸士出の気合の入った教官、そして金鷄勲章を二つも持った猛者、戦場帰りの教員もいて、のんびりと”タンゴ”などに浸っていた私には生き地獄のありさまでした。ただ、入隊前には十分覚悟していた私的制裁（びんたや陰湿な苛め）はほとんどなくそれだけは助かった思いでした。軍の上層部、いわゆるお偉いさんから学徒兵に対する私的制裁禁止の命令が出ているとかまことしやかに伝わってきました。そのためか後日幹部候補生になっても不敵な面魂をした者は少なかったようですがこれは私の思いすごしかもしれません。よく映画やテレビなどで将校や古い兵隊が新平さんをこっぴどく殴っているシーンを見ますがあれは少々誇張されているようにも感じます。

私は決して日本の軍隊だけを誹謗するつもりは毛頭ありませんし、軍隊を礼賛、賛美する兵隊大好き人間でもありません。世界中どこの国の軍隊でも皆同じでわかりきったことですが、軍隊とはきわめて良く管理された組織的な破壊と殺人の暴力集団で、あけてもくれても相手を殛す訓練をするところだから決して居心地の良からう筈はなく、”人の嫌がる軍隊に志願で出てくる馬鹿もいる”という戯歌ざれうたにもあるとおりにおぞましいとまでは言わないが私にはどうも肌が逢わない思いでした。併し一旦戦場に臨めば、壊さなければ壊される、殺さなければ殺されるという命の遣り取りの場でもあり極限の状態の中では好むと好まざるとに関わらず朕の命令には従わざるを得ませんでした。

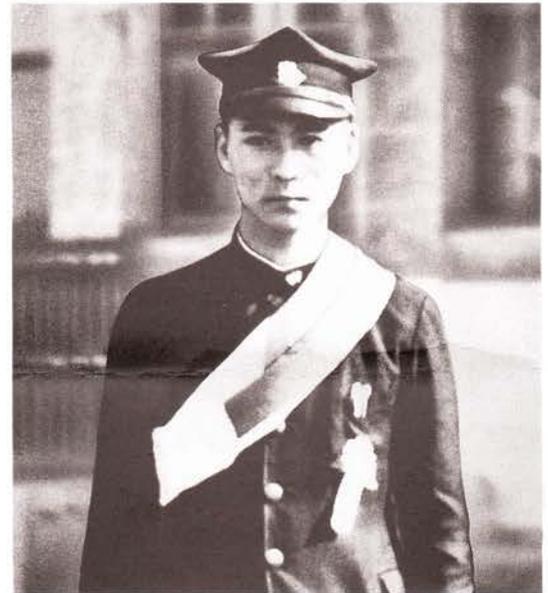
前述のとおり、私は軍隊大好き人間ではありませんが、軍隊の良かったところも十分認識しているつもりです。それは秩序（規律）がきわめて厳正であったこと、また上官と部下が強い信頼関係を保っていたことです。簡単なようですがこれを今に当てはめたら世の中少しは良くなるのでは、と思うのは私の独り善がりでしょうか。

兵隊として心得なければならぬ基礎的訓練が終わったころの2月中旬に、思ったより簡単な試験が行われ3月1日付で幹部候補生に採用になって、一等兵の階級に進みました。幹部候補生であることを示す徽章（通称座金）が階級章のわきにつきこれで一般の兵と区別していました。3月10日付けで甲種幹部候補生（乙種は原隊か師団に集めて教育の後、伍長の階級に任官する下士官コース）に採用になって上等兵の階級に進み、予備士官学校への入校準備に入りました。一緒に入隊した50名のうち28名が甲幹に採用されました。

日支事変、ノモンハン事変、太平洋戦争と続いた消耗戦に加え数百万に上る兵員が動員された結果、尉官の数が足りなくなって士官学校出身者だけではとても間に合わず、さりとて兵から一階

級ずつ進級して10数年後に准尉になり、その中で特別に優秀なものだけがごく少数少尉候補者（候補生ではなく候補者と呼ばれた）の教育を経てやっと少尉に任官する人も居るにはいたけれど徹々たる人数で、不足分を補うことはとてもできなかったでしょう（准尉になれば誰でも少尉候補者になれるとは限らず、兵から尉官になるのはとてもむづかしくて、そのうちに年を取り停年を迎えるので尉官になれる人は少なかった）。その欠員の補充として浮上したのが大学、高専在学中の学徒でした。旧制中学の五年もいれて7~8年から10年以上も厳しい軍事教練を受けていたから、短期間の速成教育で何とか間に合わせようとしたのも頷けることです。太平洋戦争のとき陸・海を問わず、中尉・少尉の70%近くが学徒兵出身者だったと後に戦史を編纂した防衛庁の統計が示しております。

甲幹に採用になった際一番驚いたのは父親でした。あれはなんで甲幹になれたんだ。大丈夫かな？あれがいまに将校になるようでは日本の軍隊も先が思いやられるな！などと言いながらも嬉しそうに早速郷里の旧家へ日本刀を分けて貰いに行き、それを研師とぎしのところへ急いで持って行くと母親からの手紙で知りました。戦前は今と違い、何代、何十代と続いた田舎の旧家の蔵の中にはたくさんの刀がしまっており、また、正真の《刃のついた》槍やぶしなどが長押ながしに飾ってあったものです。



入隊当日（肩から下げているのは寄せ書きのある日の丸の旗）筆者

譲ってもらった日本刀を父親が借行社に持ち込み尉官用の刀緒のついた軍刀に仕上げてもらいました。尉官への任官者急増のため軍刀としての日本刀の需要が高まり数の限られた古刀は間に合わなくなって、一部機械で鍛造する昭和新刀が多く製造されました。強度を増すために古刀に比べ刀身を稍厚くしたので少々重くなったようです。それを聞いた同期生は、やはり重いよ、すこしぐらい値段が高くなって古刀にすればよかったとこぼして

いました。

日本国内には予備士官学校として、北から旭川、盛岡、前橋、千葉、豊橋、善通寺、久留米などがあり、(また、台湾や朝鮮、中国の保定などにもあった) 戦車学校は千葉と久留米にあったのでそのうちのいずれかに入るのだらうと思っていたところ、突然満州国の奉天(現在の瀋陽)と聞かされてびっくりしてしまいました。それは日本陸軍の精鋭中の精鋭、その名を聞けば泣く子も黙るとまで言われた関東軍の隷下^{れいか}だったからです。

日本の各部隊に入隊の後、戦車の甲幹に採用された320名の同期生が奉天に集められました。正確には奉天陸軍予備士官学校^{スーピン}四平分校に入校ということになりました。戦車要員として300名以上のそれぞれ素材の違う候補生を均一な規格品に仕立て上げる教育施設が国内には無かったのです。四平というところは満州国の首都新京(長春)^{チエンチュン}と経済都市奉天市の中間に位置し、外蒙古の入口としての要衝を占め、関東軍の機甲師団の中心的存在、即ち、戦車・装甲車その他の軍用車輛を合わせると一千数百輛を保有していて、日本内地では想像できぬほどの大規模な機械化部隊の一大駐屯地でした。これは対ソ戦に備えての戦備でした。

戦況は日を追って厳しさを加え帝国存亡の危機が叫ばれており一日も早く初級指揮官の補充が待望されていました。そのために進級も早まり、4月1日付で伍長の階級に進み、同5日には四平に到着、校長太村少将から「奉天陸軍予備士官学校四平分校に入校を命ず」と言う命令下達式があつて正式に予備士官学校入校ということになりました。

当時、陸軍では伍長以上准尉までは、判任官として扱われ、その階級に進むときは任官すると言つたが、候補生は生徒の身分なので、伍長になつても任官ではなく、階級に進み、とか階級を与えられるというように呼称していました。但し、同階級の伍長・軍曹・曹長の場合、序列は幹部候補生の方が前任(上位)として扱われました。教育・訓練のきびしきは徹底したものでしたが、それでも起居をする部屋や寝具、食事入浴等は一般兵や現役の下士官と違い将校に準じた扱いでした。6月1日付で軍曹の階級が与えられ、前年12月の入隊ですから約1ヶ月に1階級ずつのスピードで進級したことになります。教育期間の短縮によって詰め込まれた学科、術科の総仕上げとその成果を結実させるために8月中旬から図上演習と十数日に亘る実戦さながらの野外演習が下命されました。大興安嶺をこえて2千キロメートルにおよぶ一大行軍、演習が展開されたのです。そのありさまは当時の私達の目には壯観と言えほどの大規模なものでした。教官である将校15名、助教である下士官50名、我々候補生320に加え、行を共にしているいろいろ面倒をみってくれる軽重隊即ち、幕舎、弾薬・燃料・糧秣・給水・通信・兵器車輛の整備・各部品を搭載などと人員の

輸送も兼ねた車輛50輛に加え、中型戦車(乗員4名)15輛、軽戦車(乗員3名)15輛、装甲車10輛という編成で、海軍さんの何万屯もある大きなフネが沢山集まった様子には比ぶべくも無いが、興安嶺の麓に向かって砂塵を捲きあげながら、あくまでも蒼く澄みわたった大空のもと大草原を疾駆するさまは、いま思い出しても映画のシーンか絵巻物を見ている感じでした。興安嶺といつても日本の急峻な山脈とは違い、勾配の少ない丘陵と言つた感じで、何時間も走って、後を振り返ってみると稍高いかなと、思うような訳で、大陸の広さをしみじみと思い知らされたものです。この広い地平線と空とが一体となるところに沈む大きくて真紅の夕日は日本内地では見ることができない荘厳なものでした。途中白城に至り在留邦人が日の丸の旗を振りながら大歓迎のうえ、冷たい水などを振舞ってくれたことを憶えております。乾いた草原での冷たい水はまことに甘露だったのです。ホルチン右翼前旗、索倫、王爺廟^{ワイディョウ}に達し軍関係者以外は、朝鮮の人、現地の満人、蒙古人は勿論例え日本人でも、関東軍司令部当局の許可証がない者はこれより先には一歩も立ち入ることができない要塞地帯です。索倫の先巴倫阿爾山^{ハロンアルシャン}は興安嶺を背に外蒙、ソ連国境に対峙する格好でハルハ川を挟み約200キロメートルにあまる要塞が、鹿島組(現在の鹿島建設・・・本社赤坂)の請負によって構築されつつありました。数万人の苦力(19世紀、植民地開発に酷使された東洋人の下層労働者)の血と汗の結晶も、終戦のどさくさにまぎれ怒涛のごとくなだれこんで来た約百万のソ連軍に瞬く間に蹂躪されて、たった2日間で突破されたと聞きます。日本軍の中で最精鋭と謳われたさしもの関東軍の精鋭も殆ど南方へ転出を余儀なくされ、そのあとは召集兵や現地招集の補充兵の寄せ集め部隊になつてしまつたのでさもありなんとの評価です。日本の国土の何倍もある広い満州で、幸運にもたった3ヶ所しかないうちの一つである温泉に出逢いました。この地ハロンアルシャン(日本の後押しで満州国が掠め取つた蒙古領)にはどういふ訳か大変良い温泉が湧出、その湯量も豊富であり露天風呂は一度に200人以上も入れる規模なのでみな大喜び、候補生同士暫し裸の付き合いに興じました。

このハロンアルシャン周辺には、国境守備の兵隊さん(戦時の二ヶ師団兵力約4万)が駐屯していた、戦時中はまだ卵にもなつていなかったこのごろのマスコミの若い連中が、さも目のあたりに見て来たかのように書き立てて、物議を醸し出している、慰安所なるものもありました。曖昧屋の禿茶瓶に騙されて連れてこられたのか、どんな事情があつたのか、どうして日本から遥々こんな辺境の地に来て彷徨い歩いているのだらうかと、うら若い日本の女性をみて哀れを感じたものです。候補生は、生徒の身分なので一歩も近づくことはできなかったけれど・・・

この先はハルハ川に沿って、ハンダガヤ、ノモハン、將軍廟ホロンバイル草原と続き、満州国と外蒙の国境に最も近く僅か数キロメートルしか離れていない場所もあり、いつ何が起きても直ちに対応できるよう戦車砲や重機関銃は勿論、各車輛に搭載されている銃座の機関銃にも実弾を装填し、ピーンと張りつめた緊張の中での演習が行われました。もうこのころになると嘗てのドングリコロコロの仲間もみな愚痴など零す者は一人も居なくなり、なんとなく顔も引き締り、キョロキョロしていた目も落ち着いて、挙措、動作も端正になり、小気味よいほどキビキビとして眼の輝きまで違って見えるような候補生になっていました。入隊時には萌しみたいにヒョロヒョロして見て見るからに頼りがいのない青瓢箪みたいな学徒兵も確かりと洗脳され、鍛えあげられて、ついその気になってしまい、軍の偉いさんが、泣いて？喜ぶほど逞しい軍人さんになったように見えました。草原での演習は実践^{きな}宛らの厳しいものでしたが、得がたい貴重な勉強も多くさせてもらったと思います。辛く苦しかった演習ではあつたけれど、ともすれば落伍しそうな同期生同志、お互いに庇い合い、助け合い乍ら、見習士官になるための終末の査閲を切り抜けることができました。統監をした佐伯大佐の講評は”極めて良好と認む”と、破格の評価でした。候補生も必死に頑張ったのは事実ですが、文字にすればたった8文字の中にあらゆる意味が込められていたと思います。この後すぐ戦場へ馳せ参じる若い候補生への^{はなむけ}「驢」と激励、或いはまた軟弱に見えた学徒をよくもここまで鍛え上げてくれた、ご苦労さん！と教官や助教に対する^{ねぎらい}「橋」の気持が入っているようにも取れたのです。そして最後にひとこと「諸子の武運を祈る」と、情実や私情の罷り通らぬ軍隊の中でのお話です。佐伯大佐はその後少将に累進、沖縄で勇戦中に壮烈な戦死を遂げられ、中将に昇進されたと聞きます。けれんみがなく清廉、あふれるばかりの温顔、軍人には珍しい慈父のような人でした。

苦しさが大きければその後の充実感もそれなりに大きく満ち足りた気分、帰路は往路と違う路を辿りました。8月末とはいえ夏の短い北満の草木は早くも色づいて、つい先日まであれほどすだいでいた虫の音も掠れ、ほんの一瞬ふと、”望郷の念”、海拉爾^{ハイルアール}から齊齊哈爾^{チチハル}を経て哈爾濱^{ハルビン}へ。

この街ハルピンは、ここが満州国かと見紛うほど丸い屋根の上に尖塔が聳え立つ建築物が多く見られて、御茶ノ水のニコライ堂を偲ぶような風景に出くわし、一瞬ハットするようなこともありました。ロシア革命によって帝政ロシアが崩壊したときに、ツァー側についていた貴族や軍人、芸術家、一般民衆が難を逃れるため大集団（一説には5万人ともいわれている）でなだれこんで来て作ったのがハルピンの街で、彼等はロシア正教の教徒が多かったのでたくさんのモクスも建てられたのだそうです。その後日本、

中国、中近東、ヨーロッパ、南北アメリカなどに散っていた人達もだんだん集まって十数万人のロシア人の街ができあがりしました。スンガリー河畔や、キタイスカヤ通りには碧眼、金髪、白皙、いわゆる私達が白人と言っているたぐいの連中が溢れていました。故国を捨てた人達の割には案外陽気で、彼等は白系ロシア人と呼ばれていました。戦時中にもかかわらず、少し治外法権的なところもあって、どこから手にいれるのか生活物資も豊富ではないがだいたい何でもあり、既に日本国内ではお目にかかれなかったコーヒーなどにもありつきました。特に嬉しかったのは日本内地とちがいの音楽を聞くのもあまりきつい制限がなく勿論タンゴは公然と聞けたけれど、ちょっと内緒でジャズもシャンソンも、しかもナマ演奏で！。そして戦後新宿の歌声喫茶などでよく歌われた本場のロシア民謡なども堪能しました。ここで耳にしたバラライカの音色は、ツイターとはまた違って、繊細で爽やか、そして^{じょうじょう}嬌々たる余韻にすっかり魅了させられて、戦時であること^も軍人の端くれであることも忘れついうつりと聞き惚れる始末。また、ここで久し振りに聞いた懐かしいタンゴの名曲「小雨降る径」「ラ・パロマ」「ジェラシー」「黒い瞳」など何十年たった今でもその旋律がはっきりと思い出され、私にとって忘れ難い二度目の感動的な“タンゴ”との出会いになりました。特に「黒い瞳」のメロディーは、黒い瞳に黒い髪、美しいジブシー娘のまなざしに、知りそめた恋心をえがいた曲です。ロシアのウクライナ地方のジブシー民謡にもとづいて、ハリー・ホーリックが1926年にアレンジしたコンチネンタル・タンゴとして有名な曲。戦前わが国でも大流行しました。また、「黒い瞳のジブシー」もよい曲で、前者と同じようにジブシーメロディを取り入れたタンゴの名曲です。この曲も戦前から有名でした。作者はバアツェック。ジブシーはもともとインドに発した東洋系の民族でしたが、四世紀^もヨーロッパの東部に現れ、中世を通じて各地に分散してゆきました。そして、ハンガリーやルーマニア等を中心とする東欧地域とスペインのアンダルシア地方などを流浪しながらその土地の音楽を吸収して独自の形に発展させてゆきました。そのためかもの悲しさと郷愁をそそるような曲が多いのです。

ハルピンには関東軍諜報の元締めである特務機関が置かれており、陸軍中野学校生みの親、秋草俊大佐が機関長として在任中でした。「近代戦と諜報戦に就いて」という訓話を聞き、非常に深い感銘を受けました。秋草大佐は足利市出身、中野学校の開校に尽力して多くの卒業生を送り出した後、関東軍特務機関長として勤務少将となり、終戦時ソ連に連行されて、後消息が不明ということ。その後ご遺族から死亡宣告の申し立てが出されました。陸軍中野学校について詳しいことは省きますが、この学校の卒業生は特務機関員とは全く任務が異なり、諜報、謀略、防諜を主た

る任務とする要員で、(俗に言えばスパイも兼ねる) 学校は中野電信隊(現サンプラザ)と同じ敷地内にありました。諜報とはいうまでもなく、相手側の企図や動静を探ることであり、謀略は相手側を不利な状況に導くような工作を施すこと、防諜は相手側が我が方に対して行う諜報または謀略を事前に察知して、これを防止することにあり、近代戦には欠くことのできない、枢要な武力戦の補助手段だけではなく「政略戦」「経済戦」「思想戦」「心理戦」などの領域にまでおよんでおりました。謀略宣伝・遊撃(ゲリラ)も正規軍の戦列外にあって友軍の作戦を有利に導くような大事な任務も与えられておりました。中野学校一期から三期までは陸軍の甲種幹部候補生出身の中・少尉・見習士官が充てられていたが、太平洋戦争が始まる少し前からその重要性が認識されて、後には士官学校出身者も入校するようになりました。一般軍隊においては「百事、戦斗を以て基準とすべし」と定められ、軍隊で生活、教育訓練などすべて戦斗をもって基準としたが、中野学校においては「百事、秘密戦を以て基準とすべし」の鉄則にもとづき学校全体がそのように動いたと聞いております。一説に因ると秘密戦勤務要員としての本質上、戸籍を抹消して勤務したような噂もありましたがそれは間違いで、長男とか妻帯者を避けたのは事実だったようです。彼等は外交官、商社員、船会社の社員あるいは船員、芸術家、その他軍人とは関わりのない職業に携わっているように装って、東南アジアは固より、インド、パキスタン、ドイツ、ルーマニア、スペイン、中・南米諸国、アフリカ等に潜入して活躍、情報戦に寄与するところ大であったとされております。ちなみに、中野学校二俣分校(静岡県天竜市二俣町所在)1期(昭和18年)出身の小野田寛郎少尉はルバング島に派遣されて任務についていたが、大命によって方面軍の杉兵団が米軍に降した後も、上級機関からの命令が到達せず、したがって終戦を知らず、終戦を信ずることなく、日本人による救出工作班の呼びかけを敵軍の謀略と疑い、あくまでも生き延びて任務を完遂しようとする信念に燃えて昭和49年まで頑張った話はあまりにも有名です。

話は変わって、ハルビンで私の心の中に鮮烈に焼き付いた、感動的な二度目の“タンゴ”との出会いに別れを告げ、候補生教育日程の都合により満州国の首都新京は素通りして列車で奉天に向かいました。演習に使用した戦車その他の車輛は前述の輜重隊が四平に持ち帰ることになったので、列車の旅になったのです。

教官は別車輛、候補生仲間だけの車輛は年甲斐もなく修学旅行に似た雰囲気、最高にリラックスの気分、やがてその頃関東軍内ではやっぴり、少々哀調をおびた“小朔吹く夕べ北満の”という出だしで始まる緩芬河(ソイフェンホー)小唄という歌や“同期の桜”など肩を組んでの大合唱となりました。あと旬日を出ず

して見習士官に任官する予定であり、兵科の見習士官は原則として出身原隊の中隊に帰る決まりであったが、戦局はそのような悠長なことは許されない緊迫した情勢だったので、卒業、即戦場行きとなる明日をも知れぬお互いの此れからに思いを馳せながら、みんな頑張ろうという気持と、たった5ヶ月ではあったが厳しい訓練を助け合ながら堪えた日々を振り返り惜別の情ひとしおだったことが、候補生同志の気持を昂揚させたのでした。久し振りに楽しかった列車の旅も終り、奉天北大營の営舎に入りました。卒業まで数日しかない慌しい時間をさいてここでもまた忘れ難い貴重な体験をすることになりました。

その体験とは3時間に及ぶ、甘糟元憲兵大尉の「五族の協和について」という大熱弁を聞いたことです。五族とは、日・鮮・漢・満・蒙の五民族を指し表題だけを見れば極く在り来たりの感じですが、彼の波乱にとんだ人生経験などを交えながら、滔々として止るところを知らぬが如く一気に喋り捲り、その話術の巧みさと雰囲気^{とどま}に引き込まれ圧倒されて3時間があつという間に過ぎました。

甘糟大尉のことについてはご存知の方もいると思いますが、直接彼の容止を目のあたりにし、肉声を耳にしたのは小生だけだと思うので、私の知っている有名な甘糟大尉について少しだけ書き記してこの稿の終りとします。

甘粕正彦、仙台生まれ、名古屋陸軍幼年学校を経て陸軍士官学校(24期)500人中34番で卒業。士官学校での訓育班長は後の大将東條英機氏。歩兵科の少尉のとき足に怪我をしたので退役を願い出たところ連隊長竹上大佐(後中将)は彼の才幹を惜しみ憲兵に転科するように奨めました。数年後憲兵大尉になって麹町憲兵隊長として勤務していたが、大正12年9月1日関東大震災が起り、鮮人大暴動の不穏なデマが乱れ飛ぶさ中、どさくさに紛れて、無政府主義を唱える巨頭大杉榮と同調者内縁の妻伊藤野枝を、国家の害毒を芟除する^{せんじよ}とう名分によって下士官に命じ殺害した。それだけならば何とか蓋をして内々に処理できたかも知れないが、無残にも野枝の身内である宗一(7歳)までも殺してしまった。これを新聞記者に嗅ぎつかれてしまったので、俄然社会問題化した。ここに至っては軍の上層部も看過することができなくなり、甘粕大尉は軍法会議(軍の特別裁判所)にかけられて、求刑15年、判決は懲役10年。軍籍を剥奪され、位記も返上させられ、獄に繋がれてしまいました。

しかし、一説には一大尉ごときが一存で、そのような大それたことはできるはずがない、軍部や特高警察などその筋では、この際、無政府主義者を一掃しようということになっていたのではないだろうか。「甘粕は独身だったからその実行について、白羽の矢を立てられたのだろう」と彼を知る陸軍部内では頻りに噂になつ

ていた。その当時、警視庁官房主事、後の警務部長であった正力松太郎氏（後の読売新聞社社長・社主）は真相を知る一人とされていたが黙して語らず、真相は闇に閉ざされてしまいました。

甘粕氏は10年の判決にも関わらず、僅か2年数ヶ月で出獄して上海に渡り、その後豪華な客船の特別船室におさまり渡仏したが、その生活費も含めて莫大な費用は、出獄者が賄えるような小額ではなかったとか、軍が面倒をみたが正規な支出はできないため、使途を秘匿できる機密費から出されたとも言われていたそうです。ゆっくりとフランスで休んだ彼は、いつとはなくシベリア鉄道で帰国後満州入りをして、満州建国に奔走の後、満映（満州映画協会）の理事長として他を圧倒するような勢力を振り、飛ぶ鳥を落とすといわれるほどの勢いで満州国の情報を左右したそうです（彼は終戦まで16年間満州に君臨した）

講演に来るといので候補生10名ほどの中の代表の一人として私も営門で整列して出迎えましたが、満警（満州国の警察）のサイドカーの先導、護衛付で入って来た彼に対し、営門通過の際衛兵司令の号令で、衛兵が捧げ銃をしました。軍律の厳しい中、軍人でもない平服の彼に対する敬意の表現としては些か過剰ではないかと寧ろ奇異の感じがしました。この一事をとっても彼が如何に破格の処遇を得ていたかおわかりでしょう。尤も陸士同期（24期）はみな少将、大佐級に累進して、関東軍を牛耳っていたので皆で庇護したとも言われていました。また、時と場合により彼は甘粕閣下と呼ばれておりました。甘粕氏の肩書きは満映理事長だが、一部の人はこれを彼の隠れ蓑とよんでいたようで、彼は工作員を各所に派遣して情報を集め、度々日本に来て東條首相に直言し、関東軍幹部と深い交渉を持ち、また、皇帝溥儀をはじめ満州国要人も密接な関係を持っていたとか。国策に沿う情報、宣伝に寄与したとの評判だったが一面では体よくまた利用された感は否めないと言う人もいました。

日本での公演の時日本劇場のまわりを十重、二十重に取り囲んだファンを熱狂させた世紀の美形「李香蘭」（山口淑子元参議院議員）などは甘粕氏の大のお気に入り、長谷川一夫と共に数多くの満映映画に出演していたのもこのころでした。また、早大商学部卒業直前に中途退学の後、新京放送局に就職していた森繁久彌氏はしょっちゅう呼びつけられて、放送についてのきびしい条件や注文をつきつけられて、大変な苦勞をさせられていたとか。甘粕氏は、ソ連軍による逮捕を恐れ、日本の敗戦3日目8月18日に満映理事長室で自決して果てたそうです。

つづく

旧日本陸軍の階級と職務			
親任官	大将	陸軍幼年学校、陸士、陸大等軍の学校卒業後、東京帝大や外国の一流大を出た者もあり大臣など歴任、戦時数十万の指揮官	
勅任官	高等官一等	中将	上記同様軍の選良師団長数万の兵指揮、陸軍次官、大臣として活躍
	二等	少将	上記と同様、時には旅団長として1万の兵指揮、他省庁の局長と同等
奏任官	三等	大佐	多くは陸士卒、大過なく勤務すれば連隊長として3000名の将兵の長となり勲三等に叙せられた他省庁の部長同等
	四等	中佐	士官学校卒古参は規模の小さい連隊長、他省庁課長同等 30才後半
任官	五等	少佐	士官学校卒30才代で1000名を指揮する大隊長
	六等	大尉	士官学校卒は未来の連隊長将軍の卵、幹部候補生（旧中高専大卒）出身者など戦斗単位の中隊長を指揮する中隊長部下300名～
官	七等	中尉	中隊長候補者少尉以下中隊の下士官の指導にあたる 23才ぐらい
	八等	少尉	陸士出身は21才ぐらいで70～100名の小隊を指揮する小隊長、幹部候補生出身者も多し
	八等扱	見習士官	陸士出身者及甲種幹部候補生出身者は6ヶ月程度の隊付を経て少尉任官
判任官	一等	准尉	二等兵からの叩き上げ入隊後10数年35才ぐらい特に優秀者は稀に尉官に進むことあり
	二等	曹長	准尉の予備軍、軍隊の経験豊か10年以上のベテラン多く中隊には2～3名しかいない貴重品扱い
	三等	軍曹	乙種幹部候補生出身も居たが、多くは一般兵からの志願者を教育任官させ兵と兵営内で寝食を共にし班長分隊長として勤務
	四等	伍長	上記と同様直接兵を指導、判任官四等階級章に銀筋が入り下士官らしくなる
兵	兵長	一般兵(21才)の中での成績優秀者及び少年兵の学校卒業生は16才～17才で兵長、未来の下士官要員、兵を指導する	
	上等兵	入隊後成績の良い者、新兵教育の助教	
	一等兵	年数が経てば少々悪でも、少し脳天気でも誰でもここまでは進級した	
	二等兵	最下級兵、召集兵の中に娯楽では会社の社長、官庁の部課長帝国大学出身のエリートなどいたが一度はここでピンタ経験	

戦車戦斗室のイラスト



III、予備士官学校修了～北方派遣軍配属

入隊当日の朝父親がだまって差出した別れの杯に、母親もまた口をつぐみだまって酒を満したかのようにみえたが、微かに私の耳元で生きてかえっておいでと囁きました、しかし私の気持は、其の時すでに「吾基より生還を期せず」の心境に達して戦死してもそれは運命だからしかたがないと言う戦時の大きな時流に押し流されてゆく若者の誰もが抱いた悲壮な気持を私も十分に味わいました。

私は旧制中学校の5年間は言うに及ばず、早大に入ってから勉学にはいそまず、暇さえあれば喫茶店に入って“タンゴ”を聞いたり、ムーランルージュに入り浸る毎日でした。軍隊に志願して御国の御盾になろうとする健気な軍国少年達を横目で見ながら

青春を謳歌しておりました。傍から見れば駄目人間の見本だったとおもいます。その駄目人間である私に一大転機を齎したのが徴兵猶予停止の措置でした。自ら進んで志願した訳でもないのに、神宮球場で行われた出陣学徒壮行会で、東条首相が、送別の言葉として言った中に「諸子は大東亜共栄圏確立のため、今や蹶然として象牙の塔より出で立ち」とまるで私達が自ら望み喜々として出陣するような言い方に、それはないでしょう、もてる権力で都合のよいように法を改正のうえ、若者を学園から追い出しておきながら、蹶然として象牙の塔より出で立ち、などと笑止千万、ものも言ひよう、言葉の便利さとはこのことだなど、おもったものの、時の大きな流れには抗する術もなく、やれ学徒出陣だ、戦線へ向かう若桜だなど煽てられ、囁し立てられて、無理遣り軍隊に抛りこまれてしまいました。私は自分でもそう思う程生来

怠け者で、規則正しい生活は不得手でしたが兵隊さんになってからは大嫌いな規則正しい生活を強いられる羽目になり、不得意を正され、鍛えあげられて、ついにしっかりと嵌められてしまいました。大集団の軍隊は大したところです。多数の人間（この場合は兵）の一举手、一投足、極言すれば、目ん玉の色まで同じく見えるように改造加工・統一した規格品として製造することにはきわめて長けていたと思います。勿論、各人がバラバラに「アッチムイテ、ホイ」をやっていたのでは纏まりがつかなくなって戦場では全員戦死ということになりかねません。

やがて8月も終りの日、教育、訓練、その他予定の行事も凡て終了、やれやれ、あとは待たれる明日の任官の日か、などど、駄洒落を飛ばし乍ら同期生仲間何人かと暫しの間ベッドにひっくり返り、過ぎし日の辛かった数ヶ月の事などを回想しつつ話合っていたところ、突然、集合！の号令。いまごろなんでまた集合なんだよ、と、訝しみながら集合場所に行ったところ、なんと、なんと区隊長大尉殿の教官、やにわに「聞けー！。いまから『切腹の作法』を教える」と。私共、一瞬度肝を抜かれた体。言われ

た我々は、ご冗談にも“程”がという気持、一斉に笑ってしまいました。ところが教官みるみる茹で蛸みたいに真っ赤になって、まとも大喝一声、だから「貴様達学徒兵」は軟弱の誹りを免れないのだ、と、これは私達が一番言ってもらいたくないひとことです。ずばりとその虚を衝かれた恰好。あとは肅として声なく、気まずい空気が流れて、不思議な雰囲気・・・。

日本の軍隊、特に艦乗組全員で一緒に戦う海軍さんと違い、白兵戦で帰趨を決する陸軍では捕虜になることを極端に戒めておりました。軍人座右の銘として覚えることを強制され、どちらかと言えば、とかくの批判のあった戦陣訓には「恥を知るものは強し、常に郷党家門の面目を思い、愈々奮励して、其の期待に答うべし、生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残す勿れ」・・・原文のまま・・・。欧米の兵隊さんは勇敢に戦った後捕虜になっても勇士として帰ることができたけれど、翻って、我が大日本帝国軍人は捕虜になったり降伏したりすることを無限の恥辱として、死を選ぶように教えられていました。極端に言えば捕虜になるくらいなら、その前に自ら腹を“カッサパイテ”死になさいと言う事でした。

日本軍人の場合、捕虜になった後釈放されたり、送還されても情状と理由によって、例えば、戦場なら敵前逃亡の罪によって待ち受けているのは形式的な軍法会議の後友軍の手によって直ちに銃殺刑に処せられてしまうのです。当時、何十万、何百万という数え切れないほどの戦死者があり、その大変なありさまを少しでも希釈して世論を鎮める方策だったのでしょうが、死は鴻毛よりも軽し、とか、一死以て国に報いん、とか、また葉隠れ・・・佐賀鍋島藩の武士道論書・・・が説いた「武士道と云は、死ぬことと見つけたり」というように死を礼賛、賛美、家門の名誉とする流れがいつとはなしに、どこからともなく伝わってきて、何年か前に比喩であるとしてもすこし大袈裟ではないかと思われた、曾ての、革新都知事さんが申された、「人の命は地球よりも重い」などと比べるとあまりにも人命を軽んじた時代でもありました。武士の作法と粋がったり、恰好をつけて腹に刀を突き立てたら痛いだろう、どうしようかな、と躊躇しているうちに敵さんに捉まってしまうよりは、顛顔にパチンとピストル一発の方が手取り早くて良いな！とは同期生仲間の悲壮な結論でした。

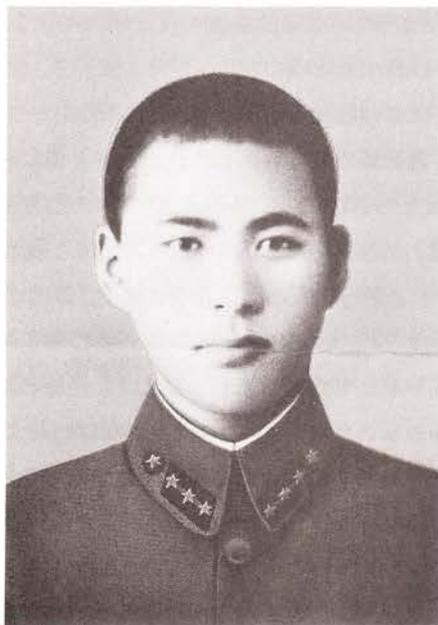
まったく平和ボケした今日このごろでは笑うに笑えないアブノーマルなことが異常として受け止められず至極当然に、真顔で行われてもあまり異端視されぬ時代のこと、以上“ハラキリ”の一駒でした。

予て偕行社に一括注文してあった将校用の軍装品、即ち軍服軍帽、正刀帯、略刀帯、長靴、双眼鏡、水筒、図囊などから細かいものの靴下や白手袋に至るまで、将校行李に詰められて届いており、

また父親が奔走して手に入れてくれた日本刀も尉官用の刀緒がつき、鞘は本革で覆われ、びかびかに磨きあげられて、立派としか言いようのない軍刀に仕上がって来ていました。また、日支事変で戦死した伯父さんの形見のリボルバー五連発が実弾と共にこれも偕行社を通じて、伯母さんから、お国のためにしっかりご奉公しなさい、と言う激励の手紙と共に届けられました。今なら差し詰め「銃砲刀剣所持等取締法」にしっかりと抵触する大変物騒なプレゼントでした。しかし、このピストルは実戦には一度も使うことなく、私にとっては一種のアクセサリーか、手のうちでもてあそぶ玩具のような代物と化してしまいました。

後述する北方の島で、焼鳥にでもしようかと恰好をつけ、腰のケースからやおらピストルを引き抜き、海鳥目掛けて「ブツ放シ」だが、ターゲットが小さく、またじっとしていない、あちこち移動するのでなかなか当たってくれず兵隊さん達から、‘ヤンヤ’の拍手喝采で囃し立てられ、冷やかされて、大いにめんづ面子を失い、且つ貴重な弾丸の無駄使いと相成った次第でした。ぶきっちょの私と違い、年季のたくさん入った下士官の中には射撃の名手っていて、距離の良くのびる38式歩兵銃で狙うと一発必中大概の獲物を手にすることができました。

物語は前後しますが、明けて9月1日関東軍から来た何とか言う（名は失念）中将閣下隣席の下、校長から「昭和19年9月1日を以て、見習士官を命ず」との、命令下達があり、晴れて将校の端くれに連なることになりました。



見習士官任官時筆者

そのときはまだ軍曹の階級章に、ごぼうけん牛蒡剣（白兵戦・肉迫戦の接近戦のとき38年式歩兵銃の先端に取り付けて敵を刺殺するための刃渡り約35センチメートルの剣。牛蒡剣は通称で正式には30年式銃剣と言う）を吊っての任官式出席でしたが、その後心尽くしの午餐会が催されると言うので急いで見習士官の階級章のついた軍服に着替え、軍刀を佩きました。本来は、6ヶ月程度の隊付き見習士官を経て少尉に任官するまでは、尉官用の生地の柔ら

かい軍服の着用や長靴を履くことはできないきまりだったが、下士官・兵用の繊維品の払底と加工する人手の関係により、私達の2期ぐらい前から特例をもって見習士官が着用してもよいことになっていました。将校の軍服を着て、軍刀を吊ったスタイルは今までの下士官の服装とはちがい恰好はついているものの、動かないで、じっと静止していれば何とか見られたが、何か動作をすると、何となくぎこちなく、各人嬉しさと照れ臭さが交錯して可笑しな雰囲気、それを紛らわすかのようにそのころ戦車隊で歌われていたこんな戯れ歌を、誰かが口ずさむ、

腰の軍刀にすがりつき

連れて行きゃんせ どこまでも

連れて行くのは易けれど

女は乗せない戦車隊

こうして出来上がった初級指揮官の卵、お互いにこの晴れ姿を一番に見せたい相手は？勿論、父母、兄弟、姉妹、親戚、恩師、友人が多かったけれど、中にはシレーっとした顔で、そりゃ“Liebe”に決まってるがなーなどと。

今朝までは助教であっても曹長は上官でありこちらから先に敬礼を行わないと欠礼になるので気を使っていたが、数時間経って人格が変わった訳でもないのに、見習士官になった途端、こちらが敬礼をされる側になった、名も〇〇候補生と呼び捨てにされていたのにこんどは、見習士官殿と敬称をつけて我々を呼ぶようになった。彼等は極く自然に何のためらいもなく、あなが恰も吾々の任官を祝福するのが当然である如く微笑さえ浮かべ、見守るように、不動の姿勢を取って吾々に対し敬礼をした、軍歴たった9ヶ月の我々に対して彼等は少なくとも7年～8年から10年ぐらいの大ベテランであり、年齢も10歳位上なので何だか悪いなあーという気持、軍隊の階級の冷厳さを思い知らされました、私達は誠意をこめて、有難うの答礼をしたものです。

何はともあれ軍隊内で彼等は一番頼り甲斐のある、頼もしい下士官でした。候補生時代は、営門の出入の際我々に対する衛兵の敬礼は執銃のまま上体を15度にまげての敬礼でしたが、見習士官になったとたんに棒槍銃にかわりその心持を味わいたくて、用事もないのに営門を出たり入ったりしするお目出たいノーテンキも何人かおりました。（下士官・兵は営門を出・入するとき門鑑を見せて衛兵の許可を受けないと出入できなかったが准尉以上・将校は、いつでも自由に出入できた）

必ずしも希望通りにはならないだろうが、任地について希望があれば出しておくようにとの指示があったのでそれぞれの希望地を1ヶ月ぐらい前に出しておきました。常夏の国明るい南の島々を希望する者が多く、理由を聞くと、暖かいし、旨い果物が沢山喰えるだろうから、などと、たわいのない単純な答えしか返ってきませんでした。その方面へ行った同期の40%近くが消耗、戦後になって随分と消息をたずねたのに再会できたのは僅かでした。

当時の写真を見ると、兄弟以上に親しみ、苦楽を共にした同期生の懐かしい声が聞えてくるようで、悔やまれてなりません。私は中支を希望しました。理由は、またまた不純なそして私流の不埒な考えから出たものです。当時中支は戦火も一段落して、戦闘はなく、死ぬおそれも少ないし、あわよくば上海の租界などを“うろついて”赤い灯、青い灯の下、好きな音楽を聞いたり、何かいいことでできたらいいな！！と言うような不謹慎窮まる考えでした。観光旅行に行ったわけでもないのに・・・。このような思いが頭を上げると言うことは、戦時と言うのにそれを度外視した私の感覚が少々“ズレ”ていたのかも知れません。教官も嘔然として暫時声なく、稍おいて、「何と情けない、貴公、早く第一線に出して下さいと、なぜ言わんのか」と。その時の私の気持は、とんでもないよ、自分から進んで雨霰のように鉄砲弾の降る前線に出て行き死ぬなんてまっぴらご免だよ、くわばらくわばらと言うのが、正直なところ私の本音でした。でも、教官の大尉さん、鳴ったり、罵倒したりはしませんでした。彼等は確か旧制中学が私達より二年ぐらい下ではなかったかと思えます。戦前ならば大尉になるには学校を入れて十年ぐらいかかっていたのが、私達の教官、士官学校二年半、少尉半年、中尉半年、新幹線のぞみ並みの進級で童顔の残る人達が多くいました。階級から言えば幹部候補生と大尉では、月とスッポン程の違いがあったにも関わらず、あまり人権を無視したようなぞんざいな扱いはしませんでした。予備士官学校に入るべく、渡満したときは、輸送指揮官のもと集団で大陸へ渡りましたが、任地への赴任は、防諜上厳重な箝口を敷かれ、三三五五、数人ずつグループを組み目立たないように奉天駅を後にしました。

ビルマ（現ミャンマー）、佛印（ベトナム）、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、海南島、南洋の島々（北マリアナ・ミクロネシア・カロリン諸島、パラオ諸島）、スマトラ島などに静かに散って行きました。南へ行きたかった彼等のうち何人かがその後沖縄に転出した者を含め、前述のとおり約半数近くが散華して還らぬ人となっております。

私は中支を希望したにも関わらず、北方派遣軍に配属ということになり、あまりパットしない気分でしたが、しょうがないなあ！暖かいところ、寒いところの違いがあっても同じ日本軍隊のこと、まあいいか、と言う気持ちで当時の新京発釜山行の特別急行列車で南下、途中平壤（ピョンヤン）と京城（ソウル）を見物、一路釜山へ。出発に際して受けた注意は、行き先などの秘匿と、努々三等車などに乗って帝国軍人としての矜持を汚さないようにとの二点。その頃日本国内は勿論、朝鮮および満州国内の列車の等級は上から、一等・二等・三等に区分されていて、乗車賃・特急料、寝台料共すべて二等車は三等車の二倍、一等車は三等車の三倍となっており、30歳は疎か40歳過ぎて召集された下士官や兵隊さんが、ぎゅうぎゅうすし詰め三等車に乗っているのに、20歳を少し過ぎた若造がのうのうと二等車に踏ん反り返っている

のが何だか、とても悪い気がしてなりません。しかし将校は二等車に乗るように躡られており、旅費を浮かせるために二等の旅費を受けて三等車に乗りその差額をくすねるような吝嗇な行為は厳に慎むよう躡られていたのです。関釜連絡船で下関に渡るべく、釜山港の棧橋で乗船を待っていたとき、赤く大きい文字で憲兵と染めぬいた腕章を腕に巻き、肩から大型の拳銃を下げて、軍曹ではあるが長刀（軍刀）を吊り、辺りを睥睨するが如く、偉そうな面をした憲兵が巡察にやってきて私達のそばを通りすぎようとしていました。その横柄で尊大ぶった鼻持ちならないさまに私も少々むかっていたのですが、面倒臭いので知らん顔をしていたら同期の遠藤某という元気滄刺男、普段から元気を持って余しているような張り切り者が“待てー！”とやらかしました。流石の憲兵さんも一瞬、ドキリとした様子。それでも直ぐさま体勢を立て直して、軍靴の両踵をカチンと合わせ鳴らし“不動の姿勢をとり失礼しました”と言い乍ら挙手の敬礼をしました。乗船を待っていた何百という目が一斉にこちらを注目して、固唾をのんで事の成り行きを見守っていました。憲兵に対する制裁は中尉以上でなければ行うことができないきまりになっていたので軍紀を糾すだけに留めました。

憲兵科は陸海を問わず日本の軍人の中では一番進級が遅く戦中でも憲兵軍曹は三十歳に近い人が多かったようです。彼の軍歴からみれば幹候上りの若造見習士官など屁でもないと思ったか、思わなかったかはわからないし。或いは八方に気を配りながら巡察していたので私達の存在を気付かず欠礼したのかも知れません。元気男が軍規、風紀を糾ただけで、別に悪事を働いた訳でもないのに、その場に居合わせた私は暫くの間後味の悪い気分になりました。憲兵に対する一般のイメージはあまりよくなく、一般だけでなく軍内でも嫌われることが多い因果な兵科であったようです。憲兵は部内で“イヌ”と呼ばれることもあり、彼等の養成所であった憲兵学校の敷地が徳川時代の犬公方綱吉の時代の犬小屋跡だったというのも何故か因縁めいています。JR中野駅に近いこの土地には、大戦中、陸軍中野学校なども設けられました。現在は警察大学など同系の施設があつて縁が切れぬのも不思議なことです。

憲兵の任務は軍事警察を主とし、行政・司法警察を副としていました。軍事警察は軍規、風紀の取り締まりをはじめ、犯罪の予防、情報の蒐集など他人の周辺につきまとうことが多いので知られる原因にもなっていたのでしょう。また、軍機の保護など軍事に関係がある場合には民間人にまで取り締まりを行い令状なしで検挙（逮捕・監禁）することができたので、民間人との接触も多く、軍部の勢力が強くなった時代には権限を拡張解釈して民間人に対しても積極的に取り締まりを行ったので嫌われる原因の一つにもなっていたのだと思います。

海軍に憲兵はなく、陸軍の憲兵が海兵に権限を行使することが認められていたので時には感情問題に発展して不具合を生じるこ

ともあったようです。憲兵は独立した兵科であったが平時は師団長の指揮を受けることなく、陸軍大臣直接の管轄下にあり（戦時野戦憲兵は別）、人事の補充も特殊な仕組みで、士官学校卒業生や新兵がいきなり憲兵になることはありませんでした。

将校は尉官になってから転科を行い、兵は下士官候補の資格が生じた頃他の兵科（歩兵、砲兵、工兵、その他）から志望者を選抜して憲兵学校で約一年ぐらいの教育を実施の後、憲兵上等兵を振り出しに勤務につきました。彼等の大部分は使命感に燃えて、立派にその職務を果たしたが、中には中味が乏しいのに、与えられた権限を使いこなせず、それこそ猫に小判の状態ひんしゆくで、恰かも自分が偉くなったように錯覚して振る舞い世の罽罽かたかたを買うと共に蛇蠍のごとく忌み嫌われる者もいました。いきなり大きな警察権を与えられた者の中には、虎の威を借りる何とかの警えたごえの如く威張り散らし批判の対象になるような者もいました。

関釜連絡船もアメリカさん潜水艦の雷撃を避けるためジグザグ状の航行などをしてやっと下関へ辿り着き、そして、当時下関・東京間を走っていた特別急行「桜」で東京へ。

喜びいさんで帰って来た半年ぶりの東京は物資もなく、燈火も、何もかも管制され、市中は真暗で食べ物は何もなくなつた半年しか経っていないのにあまりにも寂れて窮屈な有様に落胆してしまいました。それでも仲良しだった“Mädchen”達にも逢うことができたし、ハルピンで手に入れて函囊の中に忍ばせておいたコーヒー豆と、真白い砂糖（もうそのころは、コーヒーは勿論、ティースプーン一杯に満たないほどの少量の砂糖も絶対に入手は不可能だった）を携えて“Liebe”の家を訪ね、家族全員から大歓迎を受けて一泊、もう思い残すことはないな！と思いつつ翌日上野から一路北上生家にたちよって殊勝？にも墓参り、好きなものを（喰べるもの）用意するから一晩だけでも泊まれないのかと言う母親の言葉に、さりげなく、時間がないんだ、とその日のうちに北方派遣軍司令部のある旭川へ向けて出発しました。平壤や京城などで道草を喰ったり、東京で他人の家に泊まったりしなければ、母親の希望にそえたのに悪いな、と心の中で謝りつつ或いは見納めになるかも知れない姫神山（啄木の詩で有名）を車窓に見ながら、生を得て以来の来し方を振り返り、生きて再び郷里の土を踏めないかも知れないと思いながら長旅の疲れにいつの間にか車中の眠りに誘われてしまいました。

司令部で参謀及び高級幹部から北方（樺太、千島方面）の状況についてこと細かく説明があり、軍司令官命令でそれぞれの任地が下命されました。樺太にいく者、千島列島の各島に渡る者同期生20数名、防諜上の理由によって密やかに各人それぞれ枚を衝はぶまれた馬のごとく、肅々と任地の島を目指して北海道を後にしました。

それも夜陰に乗じ、夜逃げ同様の状態で、その理由としては、当時札幌と、函館にロシアの領事館があり、明らかにその筋の機関員と覚しい者が何人か居て絶えず情報を蒐集しているような疑

わしい形跡が発見されたからでした。

昭和18年5月29日米領アリューシャン列島の北端にある“アツツ”島では米軍の攻撃によって、連隊長山崎大佐以下2600余名全員が戦死した戦鬪があり、同年7月25日には海軍の協力を得て“キスカ”島から、5000名余りの将兵がそれも無傷のまま、千島最北端の“幌筵島”パラムシルに撤退をしました、そのため千島は北方の最前線として位置づけられて、ロシアの北からの攻撃に備えることになりました、従って若し攻撃が始まれば吾々も懸て、国に殉じる日もあまり遠くはないのではないか、という思いが胸中を去来、いよいよ覚悟を決めなければなりませんでした。

「歓呼の声に送られて

今ぞいで立つ父母の国」……

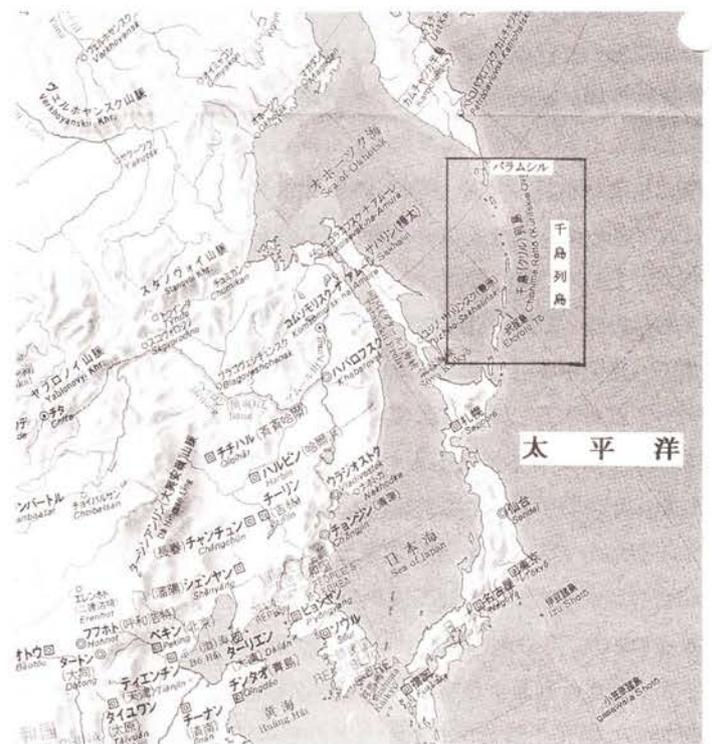
とか、「ああ、堂々の輸送船

さらば祖国よ栄あれ」……

などと、ひところ盛んに見られたお互いにテープを握りしめ、『ましいい音楽にあわせた華やかな歓送風景とは裏腹に、誠に情けないひっそりとした征途となってしまったのです。

島へ渡る船も輸送船と言った大きくて気の利いた船など疾うに沈められてしまい、制海権・制空権共米軍に取り上げられてしまっていたので、にっちもさっちも行かない状況に落ち込んでいたから昼間は島陰に隠れて米軍の攻撃を避け夜間の航行となりました、しかもその船たるや戦前漁港で見られた「焼玉単気筒」エンジンの木造船、速度の遅いこと、たった500キロメートルの行程を四昼夜という始末、いまのジェット機なら30分と少々、その当時の、時速350キロぐらいしか速度の出ないプロペラ機でも1時間半ぐらいの距離、敵潜水艦に脅えながらの航行でした。

つづく



IV、千島・得撫島での守備～本土決戦～終戦

1. ウルツプ島での守備

千島とは北海道の納沙布岬や知床岬のすぐ目の前に望むことができる国後島から北へ約1400キロメートル余（東京から鹿児島までの距離）隔たっているパラムシル島までの島嶼を言います。カムチャッカのロパトカ岬を指呼の間に位置するパラムシルには列島の守備に任じる第5軍の司令部がありました、その中の戦車部隊は戦車第2師団の管轄下に属する連隊で、連隊長は池田と言う大佐でした、北からパラムシル・松輪・シムシル・ウルツプ・エトロフ・国後などに分散して守備についておりました。

千島を地図で見ると胡麻粒ですが捉捉島にいたっては沖縄本島の2倍以上もあり、東西180キロメートル、島幅50キロメートル、島の中央には海拔1560メートルの西単冠山が聳えて、実に風光明媚、周囲の海は飽くまで水清く果てるともなく広がる群青の色、濃く深い藍の色はふと吸い込まれそうになるほど神秘的でこのような絶景は今に至るまで二度と目にしたことはありません。南側は太平洋、北側はオホーツク海に面していて海洋資源の宝庫です。昔から資源に乏しい日本は、戦前農家がお蚕を飼い、取った繭から女工さん達が糸を紡ぎ輸出品として外貨を得ていました。この女工さん達が、資本家側から労働の対価の大きな部分を搾取されたことを書いた「女工哀史」も有名ですが、もう一方北でも似たような事が行われていたのをみなさんご存知でしょうか。それは、日本軍憲兵に検挙されて理不尽な拷問と獄中における劣悪な取扱いによって死に追いやられたプロレタリア作家「小林多喜二」の書いた「蟹工船」によって明らかです、当時生糸（シルク）と並んで輸出品の一つに蟹や鮭の缶詰がありました。オホーツクの海はまわりがロシア領土に囲まれています、そのため不測の事態に備えて（拿捕など）海軍に頼みこみ、大型の駆逐艦を出してもらってその保護の下、“蟹と鮭”を獲り放題、大規模な缶詰工場を備えた1万トン以上の大きな船を数多く繰り出し我が物顔に振るまってその横暴さは、いまの日本がロシアに対する態度とは大違いで横柄の極みでした。

そのとき労働者からの乱暴な搾取を、あまりにもリアルに描写した為、それが当局の逆鱗に触れて投獄され彼は命を失ったのだと言い伝えられております。

日本国民が待望している北方領土が還っていたならば、一大観光地として喧伝されるでしょうが、未だにその気配がなく残念と言うほかありません、ロシア国内の事情や国民感情に加えて、豊富な海洋資源を手放すことにはためらいがあるのでしょうか、自由に往来が許されるようになったら是非も無く訪れてみたい気持です。

昭和16年12月、日本海軍連合艦隊の機動部隊がパールハーバー

を奇襲するためにその主力が集結して、一路ハワイを目指して出撃して行ったのは鎮守府のある横須賀でもなく呉や佐世保や舞鶴等の軍港からでもなくそれは千島の捉捉島単冠湾からでした。余談になりますが、類は友を呼ぶと申します、私同様似かよった駄目人間が集りそれぞれ“Mädchen”を引き連れ用事もないのに銀座をうろつき暇潰しに喫茶店“ウエスト”で（今も昔と同じ場所にあってその当時と変わらないベーターベン胸像が麗々しく飾ってあります、当時は戦時下で繊維製品が払底した時代でしたがそれでも頑なに、テーブルを真白いクロスで覆い店の品格を保とうと努力しているマスターの心意気が感じられる店でした、当時コーヒー屋としては、パウリスタ・トリコロール・コロバンなどがあり通いつめたものです。）コーヒーなどを喫し外へ出たら腰に“短剣姿”の瀟洒な海軍の士官さんや下士官、セーラー服を纏った水兵さん達が街に溢れていて、友人も浅草に海軍さんがいっぱい居たよ、と言うので、横須賀に大艦隊でも入ったのかな？と、あまり気にもとめませんでした。それは確かハワイを攻撃する4～5日か1週間ぐらい前のことではなかったかと思いません。恰も日本海軍の主力が国内に碇泊しているかのごとく見せかけておき、その実は旗艦赤城以下、大航空母艦数隻を主力とする数十隻の艦隊は荒波を蹴立てて一路太平洋を南下、パールハーバーを目指し隠密裡に作戦行動中だったのです、東京や横浜などに海軍の将兵を大勢繰り出したのは、機動艦隊の行動を秘匿するための陽動作戦だったようで、敵を欺くためにはまず味方からの“警”のとおり、まんまと引っかかってしまい、ハワイ奇襲のニュースを聞いて、やっぱりそうだったのかと思ったものでした。捉捉島には大きな街はなく、島民を一時禁足して、あとは無線を封鎖すれば、大事な情報が外部に漏れる恐れもなく、加えて天然の良港である単冠湾は大艦隊を收容するに足る大きな湾です、そのため海軍は安心してこの湾を選んだものと思います。

私が島流しにされたのは北海道から500キロメートル北寄りの、千島列島では三番目に面積が広い「得撫」と言う島でした、東西100キロメートル、島幅30キロメートル、沖縄本島より稍大きい火山島です、この島の中央に、ウルツプ富士とよばれていた山容の良い山があり、島に似合わず標高1300メートルもの高さがあり、景観に花を添えていました。山腹から山裾にかけて。見事な白樺林が生い茂っており、火山岩の隙間から湧き出る冷たくておいしい岩清水が集まり、やがて清冽な流れとなって太平洋に注いでいました、その川には、秋の訪れと共に数多くの太った鮭が遡上するので漁師の経験のある召集兵に任せておけばそれを獲って、塩蔵・干物・白樺のチップで燻製などを作り冬の食糧に備えたり、また、この島は何百年も前から、オットセイやラッコ、トドの繁殖地として知られていて、いまならば非難的になって

騒がれるでしょうが、当時はそれらの動物も獲り放題(38式歩兵銃の弾を脳天目がけて打ち込むと一発で一ころ)輸送船が来ないので食糧も届かないありさまだったから空腹を満たすには十分でした、入隊前は食用肉を捌く屠殺場に勤めていた召集兵さん、オットセイ1頭解体するのに10分もかからない見事な手捌きで、さすがとみな驚いたものです、また娑婆で板前やコックをしていた者も応召して来ていたし、軍隊に入る前には農業を専業とした兵隊も多くいて、野菜なども結構収穫できたり、海水を煮つめて塩を作るとき滲みでた“ニガリ”をつかって豆腐などを造ることを得意とする兵隊も居て、軍隊とは何とも不思議なところだなと思ったものです。海の荒れた次の朝、オホーツク海側の海岸へ出てみると、打ち寄せる波打ち際でモゾモゾもがいている体長40~50センチから60センチぐらいのタラバ蟹も多くいて、これは“ゴチ”の最たるものでした、その他には野兎などもたくさんいて、兵隊さん達と面白半分、(あとの半分は食糧確保のため)兎狩りに興じたことも再三でした、何のことはない私のピストルは戦いではなくこんなとき役立つのです、序に書き足しますと、ピストルや軍刀は勿論のこと軍服・長靴(将校は常時ブーツを履いていた)双眼鏡など身につける物の一切は私物で少尉任官時軍から支給される一時金で買い替え、住居も自分の持家・下宿・アパート住まい等自由で、勤務につくときはそこから兵営や軍の施設、或いは勤務場所に通勤していたのでいまのサラリーマンと同じに考えて良い……但し、戦時における野戦勤務は別……、下士官、兵は衣・食・住すべて軍から貸与・支給されており私物は特別に許可を得た物以外は所持携帯をすることはできませんでした。島の守備についていたのは、少数の小型軍用機や小型の舟艇を持った若干の海軍さんと、歩兵・砲兵・工兵・船舶兵など5000名ぐらいの陸軍さんそれとは別に95式戦車6輛というちんまりした独立戦車中隊が私の所属した部隊でした、私達の隊は総員で400名ほど、隊長は陸士出の大尉さん、軍規一点ばりの陸士出にしては捌けた人で、統率上良いとか悪いとかは扱置いて“話し”の良くわかる人でした。いづれ、ドンパチが始まれば一蓮托生あの世行き、比の期におよび、土壇場で、慌てふためき兵隊苛めの猛訓練や、志気を昂揚させるためと称しての鉄拳制裁など何の役にも立たないだろうという考え方、そのため隊内は頗る和やか、時々回って来る参謀や上級指揮官から文句をつけられてものらり、くらし、コチ、コチの軍人精神と大和魂に凝り固まり形式を重んじるのが職業軍人の鑑と言われていた戦時にはとても珍しい腹の据った頭の良い、できる人でした。島での守備は南の激戦地や内地(日本本土)の空襲による惨状に比べるとまだましでしたが、米艦の艦砲射撃にはホトホト閉口の態でした、空襲による爆弾投下ならば飛行機の爆音を聞いてから防空壕へ逃げ込んでも間に合うけれど、太平洋側の暖い海流と、オホーツク側の冷たい海水がぶつかって発生する千島特有の濃霧の中見えない敵艦から突然に1屯もある大きな砲弾を打ち込まれると退避をする

いとまがなく、つい今しがたまで煙草を吸いながら談笑していた戦友が運悪く直撃弾の破片を受けて木端微塵に砕け散り、四方八方に飛び散って僅かしか残っていない肉の塊を髯だらけの男達がポロポロ涙を零しながらかき集めるという悲しい場面は何回も遭遇しました、戦争とはこのように悲惨でむごたらしいものなのです。艦砲射撃は恐ろしい、日本軍、特に陸軍には未だなかった精密な電波探知機(レーダー)で正確に観測して、狙いを定めて打ちこんでくるので、これを具体的な方法で防ぐ手立ては全く見つからず文字どおり、敵さんの為すがまま、お手上げの状態でした。

そのころ私の身分は隊付見習士官の分際でしたが尉官の定員不足のため、小隊長の勤務につけられて、下士官、兵併せて六ヶ分隊70名ほどの指揮を取ることにになりました、しかし、生来の面倒臭がり、いい加減と言うか適当さの悪い癖が出て、兵隊さんから刻苦勉励、叩きあげた軍歴5年ほどの軍曹さん以下ベテラン下士官にお任せして高見の見物状態、決められたひととおりの^ははしたけれども、煩わしいのでうるさいことは一切抜き、と言う主義でとおしました、また、適当にお茶を濁す例として営舎から離れた白樺林に兵隊を連れて行き、軍歌演習と称して、当時巷で流行していた今で言う艶歌、高峰三枝子歌うところの当時の流行歌である湖畔の宿、純情二重奏、灰田勝彦の鈴懸の径、松平晃のサーカスの歌、ディック・ミネの人生の並木路など、など、兵隊さん達にしてみれば堅苦しくて面白くもおかしくもない軍歌よりはこの方を喜び、郷里に思いを馳せるのか、遠く離れた恋人を想うのか?どうだろう、霧島昇の「誰か故郷を想わざる」などを歌わせるとうっすらと目頭に光るものを浮かべる若年の兵隊もいたけれどこれを男らしくない、女々しい、意気地がないなどとひと言では片付けられない特別な雰囲気だったように記憶しています。仮令そこは戦場でも勇猛果敢な兵士だけではなく大変に気の弱い者もいたのです。また枯草を束ねそれを輪にして土俵作り、車座になって“ワイワイ、ガヤガヤ”相撲などをさせて興じておりました。その時の兵隊さん達の目は生々と輝き、短い時間ではあるが戦争の^{もたら}す死の恐怖を忘れる一瞬でもありました、営舎に帰隊後、中隊長のところ当日の教育訓練終了の報告に行くと、隊長曰く「ご苦労、先程は粋な軍歌?が聞えてきたぞ」と言いながら、“ニヤリ”、日本の職業軍人にもこのような人の棧微に触れ、「遊び心を理解する」将校さんも居て以外に感じたものでした。島の気候は北海道よりは暖かく雪も多いときでも50cmぐらいしかつもらないので北のわりには楽な守備が続きました。やがて年が明けて昭和20年1月1日を迎え、1日付をもって陸軍少尉任官、同日予備役編入、同日付で召集、というややこしい手続きを経た後やっと、正式に予備少尉として勤務することになりました、何のことはない見習士官になったときと同様変わったのは階級章だけで私と言う人間が一新された訳でもなく今朝と全く変わりないのに!軍隊は勿論日本官僚の形式一点張りに驚い

たものです。同期の何人かは予備役に編入される前に現役を志願していましたが、私は早く娑婆に帰して貰いたいので志願をしない不忠者でした、その頃の日本を取り巻く情勢は大変な状態になっていたのですが、我々下級将校までは断片的な情報しか伝わってこないで、大局的な国の大方針など知り得べくもなくわづかにラジオで伝わって来る程度の事しか分かりませんでした。

実際の戦況は帝国に利有らず、中央では既に本土決戦の廟義が2月に決せられていたのです、やがて4月、寒かった島に明るい日ざしが戻って来て、オホーツクの氷も溶けはじめいつの間にか島の囀る声も弾んで聞えるころ或る日突然に転属命令に接しました。将校は私や一期後の見習士官を含めて5名、下士官、兵は補充の召集兵などは除き主として現役の者80名ほどが抽出されて急遽北海道帯広市郊外音更町に展開中の戦車集団に向かうことになりました、そのとき島に残った戦友達の羨望の眼差しが今でも思い出されます、戦闘停止後敗戦、彼等は一旦樺太に集結させられて、その後シベリヤに連行、有能で貴重な多くの若者が帰還しておりません。

2. 本土決戦

20年8月15日、米軍は、日本に対する攻撃を停止、全線に亘り戦闘は終わりました、その後の8月18日になって不法にもソ連軍が攻撃して来て日本軍の中から多数の戦死者が出ました。生き残った者もシベリアに抑留されて前述のように数多くの者が還らぬ人となってしまったのです、終戦の詔勅が発せられた後に戦闘を交えたのは南太平洋から北までの日本軍全軍のうち千島の部隊だけでした。

私が所属していた戦車部隊の上級機関であり他の島で守備に就いていた“池田部隊”も砲撃を加えながら上陸してきたソ連軍と戦闘状態に陥り激しく応戦、池田大佐以下96名が戦死したそうで親しかった同期生や戦友のいたましい戦死を後になって知りました、私も北海道へ転属になっていなければ多分死んだと思います、数多くの優秀な学徒の同期生が戦死して、私のような駄物が生き残ってしまったのです、私が転属になった帯広の部隊には樺太や、千島の六つの島、北海道の各地から集められた戦車部隊要員は約5000名に達し、直ちに2コ連隊を編成して次の命令を待ちました。そのころ、米軍を主力とする連合軍側は九州に前進基地を確保するための「オリンピック」作戦、兵力81万名、東京を中心とする関東平野に進攻する「コロネット」作戦、兵力117万余、と両面の作戦計画を練りあげつつあったのです。

迎え撃つ日本軍は九州に上陸して来るとすれば鹿児島島の志布志湾、東京を目指すとすれば鹿児島灘の海岸や九十九里浜、或いは平塚方面一帯の湘南海岸であろうとの推測、迎え撃つ日本軍はこの方面にそれぞれ兵力を集中して展開することになりました。

他の兵科の兵力はさておき、この本土決戦に備える日本軍戦車集団は12方面軍に編成を行い、その大部分は20年4～5月に新に編成された部隊で、兵隊の頭数だけは一応そろえたものの、訓練の余裕もないままで配備が行われる始末でした。また、ボンコツのような日本中の戦車を寄せ集めてもたった、“1500”輛、その性能たるや米軍の“M4シャーマン”戦車と比べれば一目瞭然、例えば巨人と幼児ほどの違いがあり、その一例を挙げれば、前面の装甲厚（鉄板の厚み）が日本の一式（称号子へ車）戦車は、2.5センチメートルしかないのに米軍のM4戦車は9センチメートルもあるので、日本の戦車砲は勿論、対戦車砲の貫通力は5センチしかなかったので、若し命中しても破壊することができず「ポコン」と撥ね返る始末（マニラの攻防戦で実証された）日本軍にはなかった大口徑の自走砲など強い火力の砲を米軍は持っており戦わずして勝敗の行方が決せられたも同然のありさまでした、そこで、日清戦争、日露戦争をはじめ満州事変から日中戦争に至るまで装備や兵器の劣る分は精神論で補う一つの方法として軍人精神と大和魂の涵養が呼ばれるようになり、一旦戦いに臨めば必勝の信念をもって戦うべし、断じて行えば鬼神も之を避く、神州日本には神風あり（危難を救おうとして神が吹かせるといふ激しい風、元寇の際元の軍船を襲ったとされる大風・・・実は台風）が吹いて国難を救ってくれるなどと、子供達に見せる紙芝居屋のおじさんが絵を見せながら語り聞かせているようなことを胸に勲章を佩用し、鼻下に髯を貯えた軍の高級幹部が訓辞を垂れるありさまでまことに噴飯物でした。

しかし現実はずいぶん軍人精神や大和魂だけではとても戦えないのは明白の理です、そこで、新戦術として編み出されたのが肉薄攻撃、即ち特攻でした、特攻としては航空機ごと敵の艦や軍事目標に体当たりをして損害を与えることが一般的に理解されており、飛行機以外の肉薄攻撃は余り知られておりません、携帯地雷かそれが無いときは、10キログラムぐらいの爆薬を詰めた箱を抱えて敵戦車の下に潜りこみ命と引き替えにこれを破壊、擱座させると言うまことに目を覆いたくなるような無惨な戦術でした、フィリピンや沖縄の激戦地では実際にそれが行われたのです、14～15才で少年戦車兵を志願、競争率60倍の難関をくぐり抜けた優秀な少年達は戦車学校で2年間の教育を受けた後、16～17才で兵長になり18才になったころ下士官として軍務に服していました。その勲業の何人かがこの戦術で散って行ったのはフィクションや誇張ではなく事実です、彼等生を得ていれば花も咲き、実りもあつたらうに惜しんでもなお余りあると言わねばなりません、“七ツ釘は桜に錨”などと華やかにもて囃された海軍飛行予科練習生の華華しさに較べればあまり知られておりません、弱冠に満たない多くの若桜が従容として国のために殉じて行ったのです。17才から18・19才と言えば当世の高校生の年代です、いまは時代も違うし、教育方針も違い、世の中の行動様式もがらりと変わってしまったので一概に決めつけることは早計に過

ざるかもしれませんが、権利は主張するけれど義務は果たさず、社会的規範のすべてとまでは言わないけれど、最低のルールさえ守ることのできないこのごろの17・18才を見るにつけ、これでよいのだろうか、これからの日本はどうなって行くのだろうか？ などと思うのは私の杞憂か余計なお節介でしょうか。

私が属した第6方面軍のうち（関東地区担任）独立戦車第7旅団は、三田村逸彦大佐が率いており（私が一兵卒として入隊した盛岡駐屯北部45部隊の元部隊長であり、私の父親とは古くから面識があった）憶えていてくれて、前任部隊からの報告書類によれば貴官は兵をよく掌握しているとの評価である、しっかり頑張るようにと激励されたことを記憶しております、私が軍隊で誉められたのは、後にも先にもこのときのたった一回きりです。

大佐は、日支事変やノモハン、太平洋戦争での武勲によって既に勲三等、功三級に叙せられており戦車38・39連隊・旅団機関砲隊・旅団整備隊・旅団輜重隊、合計1万名以上の将兵の長として（平時ならば少将か中将クラスが長となる兵力）、鹿島灘地区即ち、内原付近、友部、鯉淵・大原方面の守備に任じて居りました。私は鹿島灘地区に配属を命ぜられて「波崎町」に駐屯することになりました、敵さんの上陸して来そうな遠浅の海岸には歩兵・砲兵・工兵・船舶兵・高射砲兵・輜重兵・その他 etc. 海岸地帯は兵隊さんでいっぱいになりました、上陸して来る敵兵を波打際で極力消耗させた後、あとは関東平野で徹底的に損害を与え、最後は丹沢の山塊や秩父連山に引っぱりこんで遊撃戦（ゲリラ）を展開、一兵残さず殲滅するなど、大変勇ましいように聞えはするが、情けないこと夥しく、更に加えて、一般市民も竹槍をもって戦いなさいとの命令、天正年間に織田信長を殺した明智光秀が竹槍で突かれた時代に逆行したごとき感じでした、当時米軍が持っていた強力な武器、即ちM4型の戦車や、口径の大きな自走砲、そのうえ数十メートルも吹き飛びすべての物を一瞬のうちに焼き払う火焰放射機に対して竹槍が果たしてどのような効果があると思っただけでしょうか。それとも、最初から敵わないと知りつつ、国民の戦意昂揚のための掛声に利用したとするならば無責任窮まるといわざるを得ません、とどのつまり無辜の国民に限りない犠牲を強いると共に計り知れない悲しみを与えたと思います。婦女子が竹槍を取って米軍に立ち向う前に戦争が終わってよかったですと思います。M4チャーマン戦車は、重量、エンジン出力、主砲口径共日本軍戦車の2倍以上、前面の装甲厚（鋼鉄板）は3倍以上、米・英・ソ・連合国側の生産総計75000輛に対し日本の生産は3880輛、5%にしか満たない貧弱な数字で圧倒的な戦力に抵抗不可能なことは火を見るよりも明らかだったのです。

これはほんの一例ですが、機械力、機動力、延いてはすべての戦力が連合国側に較べると格段に劣っていたのは他の兵器も同じことです。日清・日露戦争に勝ち、満州事変や日中戦争にも勝って、唯一の負け戦はノモハン事変でしたが、この事変は我が国に危殆を及ぼすほどではなかったとしても、常勝の陸軍は驕慢と慢

心があったのか、ノモハンでソ連の機甲部隊に散々叩きのめされ潰滅的な打撃を被り多数の戦死者を出したにも関わらずそれを戦訓として生かすことをせず「軍人」精神と大和魂を叫び機械化することを拒んでいたのです。海軍は軍艦をはじめすべてが機械の塊で海軍軍人の多くはエンジニアとして定評がありました。陸軍もそれを見習って何故もって機械に関心を持たなかったのか、海軍さんからは、陸軍の「馬糞野郎共」と侮辱された所以もわかるような気がします。

3. 終戦

一方、敵さんの上陸に備えて陣地の構築や空爆から戦車を守るための掩体壕掘り、各種兵器の整備に汗を流し、夜を日に継いで敵さん迎撃の訓練などにも追われてあつという間に4ヶ月がたちました。そして、或る日突然に数分間に亘る天皇の玉音と言うラオ放送があって、戦闘が停止、あつけなく終戦となりました、今までの緊張が一挙にほぐれて拍子抜け、それでも今夜からは燈火も管制せずに明るい夜が迎えられるし、何よりも嬉しかったのは戦死の懸念も吹き飛んで家へ帰れるということでした。整然と復員が行われるように、私達一部の将校や人事係り准尉、曹長以下若干の下士官共々後片付けの役を押し付けられてしまいました。

良い習慣なのかどうかは私には判らないが、日本のお役所では、お役人が定年などで役所を円満に退くときは、ポジションが一ランク上がるとか、俸給を何号俸か上げてもらう慣わしがあるように聞いていました、我々大日本帝国陸軍軍人も例に漏れずみな一階級づつ進級した、敗戦の軍人が進級したのは驚き入りしました、斯く申す私もお相伴に与かり、ポツダム中尉と言う事になりましたが、嬉しくもなく、何とも妙な気分でした、その時一瞬ですが千島に取り残された同期の仲間達の顔が頭の中を過ぎたのです、彼等はどうなったんだろうかと、私達は戦車から砲や機関銃を外したり、キャタピラのピンを抜いて走行できないようにしたり、危険な弾薬のリストの作成作業などの後、進駐して来る連合国側（米軍）に引き渡す準備に追われて旬日、やがて生死も寝食も共にした上官、同僚、部下達もすこしづつ去って行き、隊内はひっそりと寂しくなっていました。

生きて再び郷里の土を踏むことができないかも知れないと思いながら出て行った郷里が、山も川も変わりなく、我が家の庭のたたずまいもそのまま、秋のおだやかな日差しを受けて色づきかけた林檎が枝も撓わに実っており、入隊前とすこしも変らぬ姿で迎えてくれました、「国敗れて山河在り」、身をもって体験するとは思っても見なかったのに現実となってしまいました。

私にとって何よりの心残りは、父親が折角手に入れてくれた軍刀は武器だから差出すようにとの占領軍の指令でした（日本軍人の

軍刀は実戦にも使うが、平時隊列の指揮などにも使い服装に附随するものとの認識が主だったが、米軍は人を斬る純然たる兵器であるとの解釈) 違反者は米軍のMP (ミリタリー・ポリス) によって沖縄に連行されて、重労働に処せられると脅かされました、そのため集積所に持って行き掌中の珠を手放すごとく「ソーツト」置いて、滂沱と頬を伝わるものを拳で払いのけながら、後を振り返らずその場を立ち去りました、拳銃はひと塊、鉄の山と化し見るも無惨なありさまで山積みになっていました。

戦後になって「実は自分達はあの戦争には大反対だった!!」などと“ホザク”文化的知識人なる厚かましい人種が現れました。それならば、開戦前は勿論戦争が始まってからでも遅くは無い、何故声高に命を賭けて反対を叫ばなかったのか、多くの動物が冬眠するが如きさまに似て、身を潜め身の安全にのみ汲汲と、一言も発せず、御身大切に徹していた人達が戦争が終つたとたん、吾が意を得たりとばかり雨後の筍のように数えきれないほど出現したのは、さすが浅学非戈の私も驚いてしまいました、それよりもっと許せないのは、つい先ほどの戦争中は盛んに軍のお先棒をかつぎ軍国主義を鼓舞し煽り立てていた大新聞社や大先生方が一夜にして打って変わって一転、平和主義者になってしまったことでした、学を曲げ世に阿る鳩にも似た先生方や、言っていることと、行いとが伴わない鶻の嘴のように食い違っている立派な?先生方は、まるで自分達だけが平和の申し子であり、自分達が今の平和を築きあげたような言辞を弄しております。また、それに迎合して近隣諸国の鼻息を窺いおもねることを得意とする偏向した一部マスコミの情報操作によって、日の丸の旗を掲げれば徴兵制と侵略戦争に繋がり、君が代を歌えば天皇崇拜になるなどとナンセンスに騒ぎ立てる口喧しい手合いも居ります、また日本の子供を教育するために使う教科書の内容も近隣諸国の恫喝に屈し、抗弁しているのかどうか見えて来ない、唯唯諾諾と書直すような情けない事象を嘆くのは私だけではないと思いますが如何でしょうか。

私達の子供のころは、学校の先生と言えれば日常等しく敬愛の心を以て迎えられ、校長さんに至っては、生徒は勿論、一般社会からも或種の畏敬の念で遇されておりました、彼等もまた、教師としての名に恥じないよう子供の教育に情熱を注ぎその本分を全うした人が大部分で師弟愛で結ばれていたような気がします。

戦後の教師達は階級的に規定を受けるとされる政治思想(イデオロギー)に洗脳され、専ら偏向教育に励み、子弟の教育よりも何とか言う団体の組合活動に熱中する人が多く、聖職などとは何処吹く風といわんばかり、只の月給取りに成り下がってしまいました、そうして将来に亘って国益を損なうような教育を行い恬として恥じることなく平然としております戦後このような教師達に教育を受けた世代の多くがいま小学校高学年、中学・高校生の親となっております、現今にいたり若年層の事件が続発している原因は何なのか、教育とは如何にあるべきかを、為政者も有識者も

教師も親も冷静に倫理を辿り乍ら良く考えてみるべきときが来ているのではないだろうか。またいつまでも反日・反米「日米安保廃棄」に拘り、雑誌「日本の進路」では北朝鮮のテポドンや日本人拉致についても擁護の論調をしておりますが、日本悪者論の海外宣伝はもういい加減に止めた方がよいのではなからうか。

世の中、いろいろな思想、信条、表現、言論の自由があつて然るべきですが、節操があるとは思えない偉い人達や心ないマスコミの連中が大向うに向かつて見得を切るさまに私はあまり共感を感じることができません、しかし、それはそれとして今のこの尊い平和は誰の血によって購われたのか、誰の手によって齎されたのか、あの戦争で得た物は何であつたか、を考えると、恨み言一つ言う訳でもなく、承知で死地に赴き莞爾として散華した同期生は勿論、多くの戦友に対し私は鎮魂の祈りを捧げることを欠かしたことはありません。

木枯らし吹き荒ぶ寒い冬が通りすぎ、やがて華やかな花の季節を迎えるころ靖国の社頭に額突き桜花を仰ぎ見ながら感謝の祈りを捧げるとき、私は一掬の涙を禁じ得ません。

悲しくて、辛かったお話はこのへんで結び、旧制中学の演垂れ小僧のころから馴染み親しんだタンゴの思い出などを綴って終章にしたいと思います。

千島に駐留中は他隊と協同で使っていた(海軍は別)陸軍の将校集会所に、とても古びた蓄音機(動力はゼンマイ、手回式)があつて、レコードは軍歌や流行歌が多く中に混じていた「タンゴ」の曲、それもたった3枚だけ片面一曲だから6曲聴けたと云うことです、それでも私は100年も逢わなかった恋人に再会したような心持、欣喜雀躍の思いでそのレコードにしがみつきました。ちょっと想像できないかも知れませんが、そこは北太平洋とオホーツク海に囲まれた絶海の孤島で勿論娯楽施設などある訳がなく、綺麗な音などに餓えていたからです、何回も聴いた為盤面が針で擦れて真白くなってしまい、更には金属の針が枯渇したのでそのへんに自生している笹竹を斜めに削ぎ落として代用しましたそのためノイズだか曲だかわからないような始末、それでも私達が入隊前有楽町日本劇場で封切られたドイツ映画その名もずばり「夜のタンゴ」色っぽさをとおり越して、男性を惑わすようなあやしい美しさ、妖婉そのものの女優“ポーラ・ネグリ”の歌声と演技に魂を奪われたものですが何故か貴重なこの一曲があつて学生時代を思い出して感慨に耽つたものです。

終戦と同時に入って来た連合軍側兵士、特に米兵と共に打ち寄せる大波の如く、一気にいろいろな“音”musicが上陸してきました。例えば、ブラック、ミュージック・ジャズ・ロックとポップ・世界の音楽(フォークソング・カントリー・アンドウエスタン・ハワイアン・シャンソン・カンツォーネ・フラメンコ・ラテン音楽・タンゴ・サンバ・カリブソ・レゲエ)など数え上げたら限りがない

ないほどの多くのポピュラー音楽の氾濫となり、奔流のように、音楽に餓えていた日本中を席捲してゆきました。

中でも私の好きだったタンゴは戦前から愛好家がいち、一種のブームを呼びおこしました、特にドイツからはタンゴの名手とも言われた「マランド」や「アルフレッド・ハウゼ」などのグループも再三来日して私達を魅了してくれました、彼等の妙技には桃源の境地に誘うが如き名演奏が多く感嘆の極みでした、戦前からタンゴを演奏する日本人のグループも居て、「早川慎平とオルケスタ・テピカ・トウキョウ」歌は藤沢嵐子、などずいぶん売れました。より優美で洗練された形式に変化させ、ジャズや現代音楽を大胆に取り入れて、アルゼンチンタンゴの信奉者からはタンゴ殺しとまで誹謗された“アストル・ピアソラ”が亡くなったのは1992年でしたが、没後5年の“97にピアソラブームが大きな話題を提供しました。1999年に至り、スペインの＜カウロス・サウラ＞と言う映画監督が作った映画がファンから期待と歓声に包まれて日本に登場しました。撮影はイタリアの名手、＜ピットリオ・ストラローロ＞音楽はアルゼンチン出身の＜ラロ・シフリン＞、激しく、官能的なダンスと力強く華麗な調べにのせたタンゴ独特の様式美の世界を“たっぷりど”見せてくれます。対岸の国、ウルグアイ、モンテベルテの港街から、ラプラタ河口に浮かぶ「ブエノスアイレス」、このあたりの街をカメラは嘗めるように移動してタンゴの旋律と共に情緒を誘ってくれます。そして画面はタンゴ演奏の舞台へ。

生々しい現実と舞台上の虚構の世界が交錯、圧倒的な力で迫ってくる、劇中のタンゴ・タンゴ・・・、見せ場は終幕の群衆劇、大きな鞆を抱えて、ヨーロッパから来た移民が初めてブエノスに到着した時代を再現して、ワルツ・ミロンガ・そしてタンゴと踊り進む虚実入り乱れる二重構造の仕掛の中で、心ゆくまでタンゴを聞かせてくれます。つい身を乗り出してしまうほど歯切れのよいリズムと、情念が絡み合う緊迫感あふれるダンスの数々、光と影のコントラストを際立たせた＜ストラローロ＞の映像魔術にもしっかりと魅了させられてしまいます。観終わって暫くの間呆然。見応えのある映画に出逢って幸せでした。一旦映画館を出て喫茶店で休み、コーヒーなどを喫したあと、また観たくなって再び映画館へ、数日して再訪。この映画、渋谷の“ル・シネマ”で4回も観てしまいました。映画の題名は「タンゴ」でした。

おわり

本文中に幹部候補生の文言が度々出て来ましたが、幹部候補生の制度について説明を加えると共に、旧日本陸軍の将校になる方法も併せて説明します。

* 第1の方法 —— 正規の陸軍将校

旧制中学2年修了後、競争率数十倍の難関をパス、陸軍幼年学校で3年間の教育を受けて士官学校に進み卒業後、見習士官を経て少尉に任官した（20才前後）、また士官学校には旧制中学4年修了以上の者も受験をすることができた、但し競争が激しく合格は大変に難しかった、私の記憶では一流の中での一流中学で同学年200人中成績が1～3番ぐらいでないと採用は覚束無いほど厳選されていたように憶えています、優秀な彼等は陸士を出た後“なりわい”を職業軍人として大過なく勤務し終えるころには大佐（連隊長）ぐらいまで累進できた、また大尉に昇進したころ特に成績の優れた者は連隊長の推薦を受けて、陸大に進む者、東京や京都帝大、東京外語や外国の一流大学に官費で留学を許されるも居て、将来のゼネラルを約束された軍のエリートであった。

* 第2の方法 —— 傍系の将校

旧制中学の5年間は勿論、高等学校、専門学校・・・いまの専門学校とは学制が違う・・・大学学部にて文部省の委嘱を受け、当時都道府県にあった連隊区司令部から派遣された将校、即ち配属将校から軍事教練の全教程を受けた後検定に合格した者に、幹部候補生の受験資格が与えられた、軍隊に入隊して基礎訓練終了後試験によって甲種と乙種に振り分けられて、甲種は予備士官学校で教育の後隊付見習士官を経て予備少尉に任官した、（乙種は下士官として勤務）甲種幹部候補生は、学校を出ていれば誰でも全員採用された訳ではなく、例えば東京・京都帝大などの出身者でも下士官・兵として軍務に服した者もいた。従って我々と一緒に入隊した学徒出陣組も将来将校となる甲種幹部候補生の採用者は約70%～80%ぐらいであとの20%～30%は下士官、兵として兵役に服したのである。

* 第3の方法 —— 兵からの累進将校

兵役法によって徴兵された者および志願で入隊した者が軍務に励み、下士官候補者の資格が生じたころ志望者から成績の良い者を選抜して教導学校などで教育を行って、下士官（伍長）に任官させた、その後10数年間軍務に服させ、特に成績の良い者だけを選び試験を行って、その合格者は中隊長の具申を添え連隊長命令で士官学校の選科に入ることができた、そこで教育を受けてやっと少尉候補者になることができたのである、軍隊に入隊以来刻苦勉強、何百人から1人と言うぐらいの確率で、身を削るようになって得た少尉の階級、そのとき彼等は既に30才代の後半近くに差しかかっており、20才そこそこで少尉に任官した陸士卒業者とは実に対照的であった。